

---

# 物語の中の銀の髪

憑依

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

物語の中の銀の髪

### 【Nコード】

N6778X

### 【作者名】

憑依

### 【あらすじ】

「マジック・テイル」最新ヴァーチャルリアリティのVRを使ったMMORPGである。  
「マジック・テイル」をテストの頃からやりつづけている主人公が「マジック・テイル」の100年後の世界に!? 「マジック・テイル」のアバターであったレイという女性キャラクターになった男の娘の冒険の話

## 第0話 男の娘とかプロローグとか説明とか（前書き）

これは初投稿の作品です。 文字が抜けていたり、表現がおかしかったり、投稿がおそくなってしまうたりするかもしれません。 それでも見ていただけたら幸いです。

## 第0話 男の娘とかプロローグとか説明とか

ふと目を開けると光が溢れていた。

「あれ？」

ふと疑問に思った。 おかしい、俺は今日、休日だということでMORPG「マジック・テイル」をやり深夜2時頃に寝たはずだ。

この「マジック・テイル」は4年前に登場した剣と魔法のRPGである。 ヴァーチャルリアリティだが米国の軍隊に使われたVRというのを使いあたかも本当にゲームの中にいるような気分にするらしいその新機能を使った事により評判を呼びいまじゃ日本最大のMMORPGとなった俺は「マジック・テイル」の テストの頃からやっている。 今じゃ俺は最古参といってもいい廃プレイヤーである。

とりあえず起きて現状を確認しようと起き上がった。 周りは富士の樹海・・・というよりモン　ンのフィールド出てきそうな森が広がっていた。

「……………なにここ？」

そう呟いたところでふとおかしい事に気がついた。  
声が高い普通の俺も男の中では声が高い方だがこの声は鈴が鳴ったような声で呟いた。

よく見れば自分の服装や体もおかしい。 着ている服はそのまんなワンピース。 そして男なら普通持っていない大きな二つの膨らみが……

「はい!？」

胸がある!？ 顔が女らしいと言われ続けた俺が少しでも男らしくなろうと筋トレを続けていたのに筋肉の代わりに脂肪の塊に!？  
これでは本当に女だと言われてしまう!

慌てて自分の胸以外の体を触りまくる。男らしいがっしりした腕が柔らかくなっている! 足も細くほっそりとして真っ白くなっている……俺の日焼けしまくりの男らしい足が……すね毛は元々なかったけど。

そして髪は腰まであり、サラサラした銀髪。

完璧に女になってしまっている。それ以外には耳がなぜか細長くなっている……ん? 細長い耳、腰まで届く銀髪、そしてどちらかと言えば大きめの胸……この姿まだ顔は見えていないがどこかで知っているような気がする……とりあえず男らしくなろうとしていたが何故か女になっている自分の体にテンションが下がりつつもこの樹海のような場所から出ようと思った……流石にこんなところに人はいないだろうしな。

俺の名前は、白崎<sup>はくさき</sup> 陸<sup>りく</sup>高校2年生16歳いまさら自己紹介してもやや遅い気がするがしておこう。俺は生まれつき顔が女らしかった。そのせいで男子にはからかわれ続け女子に「かわいい」なんて言われてしまうような男だ。ちなみに中学の頃の部活は家庭科調理部に入っていたおかげで男子よりも女子のほうが友達が多いという状態になっていた。なに? 羨ましい? ふざけるな! 修学旅行の部屋割りでは男子から「そういえば白崎って、男子だったな。」とか言わ

れて三日間落ち込んだ事もある俺に謝れ！

こんな嫌な記憶を俺は誰に説明してるんだ？テンションが落ちてるせいで何かとナーバスになっているのかもしれない……

周りから黒いオーラが出てるかもしれないなーっと思いつつゆつくりと歩くと湖が見えてきた。周りには木々がないから時々人が来てるのかもしれない。

「お、ここなら。」

湖に近寄って湖面に顔を近づける。湖に映った自分の顔は感嘆と驚愕と予想していた事が当たってしまいなんかひどい顔になっていた……ここまでひどい顔は好きな女の子に告白したら「私、男の子がすきだから……あ、陸君は男の子か。」といわれたとき以来かもしれない。とりあえずため息をついた。湖に映った顔は、優しさで冷静さを併せ持った、笑顔が似合いそうな少女の顔をしていたが、目は水色に近い色をしていて、長い銀髪と普通の人間には見えない細長い耳。俺は、つい湖の中の少女の前でボソリと呟いた。

「やっぱりレイになってる。」

まあ、レイっていうのは「マジック・テイル」での俺のアバターだ。中学二年生の時、数少ない男友達に誘われテストに行った。

正直MMORPGは初めてだったが、とことんハマった。その時に作ったアバターがレイである姿は湖に映った自分と全く同じ姿でエルフの女性に設定した。何故女性にしたのか？……まああの頃は精神的に鬱でこんなに女らしいなら女で生まれてくればよかったのに……とか思っていたからせめてゲームでは女でいようと思っていたのだ。

「…………ネエ、ネエツテバ。」  
「ん？」

湖の水を飲みつつこれからどうしようかと考えていると何か声のような者が聞こえる。　周りを見渡すが誰もいない。

「…………ナニシテルノ？…………アア、ザンネンダケドミエナイヨ？」  
「…………え？ああ、精霊か。」

精霊…………まあ簡単に言うと大地のエネルギーの塊のようなものと「マジック・テイル」の公式HPには書いてあった。　エルフ系の種族専用のスキルで「対話」というのがあり、精霊の多い場所（森など）にいると精霊と会話する事によって遠くにいる魔物やプレイヤーの場所がわかるというスキルがある。　たぶん精霊が自分をエルフ系だと分かって話しているのだろう。

「何か用かしら？」

いつもの俺はこんな喋り方をしないが。この体がレイであると分かるつついつい「マジック・テイル」の時の喋り方になってしまう。

「アナタハイセカイカラキタ？チガウ？」

「え？なんで知ってるの？」

「ダツテワタシタチガヨンダカラダヨ？」

「あなた達が呼んだって…………私を？後なんでこんな姿？」

なぜレイの姿なんだろう？…………まあ実はうれしいが。

「ソレハ、コツチノカラダノハウガツクリヤスクテセツメイシヤス

イカラ。」

「説明しやすい？」

精霊の話によると、俺の元居た世界にあったMMORPG「マジック・テイル」はこっちの世界の100年前の姿、形、魔法、国、政治の状態などがそっくりだったらしい。その影響かどうかは分からないが世界どうしが惹かれ合ってぶつかる寸前にまでなっていたらしいが神様達ががんばって少し遠ざけたらしい。

「もしぶつかつたら？」

「フタツノセカイガブツカルト、ブンメイがマザツテタイヘンナコトニナツテタ。」

のどかな草原にいきなりビルが建つたりしていたかもしれないそうだ……

「アンシンシタノモツカノマ……コノセカイニマオウガデクルカモシレナイノ……」

「魔王？世界征服でもしてくるの？」

「ウン……」

最近隣の大陸闇の力を使い、大陸統一をし、「魔神」と言われている人がいるらしい。そしてその「魔神」がさらなる土地を探しているらしい。まだこの大陸は見つかっていないが時間の問題らしい。闇の力は、木々を枯らせ水を黒くし、空は太陽が見えなくなる程暗雲が覆うらしい。そうなれば精霊はみんな消えてしまうらしい。だが「魔神」に対抗できる人はこの世界にはいない。

100年前にあった戦争でMMORPG「マジック・テイル」では当たり前だった魔法やスキルは今の人々は使えないらしい。そこで、精霊達は神々と交渉して遠ざけていた俺の居た世界の「マジック



ク・テイル」をしていた人達から一人選んで、こつちの世界に連れてきたという事らしい。さらに神様が「マジック・テイル」の装備、魔法、スキル、姿などはこつちで作った方が色々と楽だからという理由で魂だけを持ってきたらしい。

「何で、私が選ばれたんですか？」

「セイレイトカイワガデキルエルフデ、イチバンツヨイカラダヨ」

「……ああそういうこと。」

精霊と会話が出来るのはエルフ系の種族のみ、さらにエルフ種で一番強い俺が指名されたらしい……

「マジック・テイル」には種族と職業がある。種族というのはヒューマン、エルフ、ドワーフなど様々な種族があるが、英雄度を使うと上位種になれたりする。ちなみにギルドの依頼を解決したり、国に貢献したりすると英雄度がもらえる。たとえば、エルフの上位種にはホーリエルフ、ダークエルフ、さらにその上位種にハイエルフがある。ホーリエルフ、ダークエルフは英雄度を使うだけでなれるが、ハイエルフはエルフ系の種族がなれる上位職全てをカンストのレベル500にしなければいけないという。

職業は、剣士、魔法使い、僧侶、狩人、格闘家などがある。職業はレベル一定まで上げたり上位種でなければいけないなどの条件がある。さらに面倒くさいのがホーリエルフ、でしかなれない職業やダークエルフでしかなれない職業があつたりする。ちなみに転職は魔法使いから剣士になるということもできるがレベルは1になる。だがまた魔法使いになると魔法使いだった頃のレベルになる。つまりハイエルフになるには英雄度を使いホーリエルフになり、上位職をレベル500まで上げ、さらにダークエルフになるために英雄度を使いダークエルフでしかなれない上位職になると

いう行程が必要になる。　だがこの行程が済むとエルフの最上級職のエルフマスターになれるようになる（エルフマスターになったらまたレベル1からレベル上げになるのだが……）。エルフマスターになると元々上位職で手に入れたスキルを全て使え、エルフが着れる装備全て装備できる。　このエルフマスターになった（さらにエルフマスターのレベル500）のは俺だけである。　ちなみにたった4年間でエルフマスターになれたのには理由があるが後々説明しようと思う。

「じゃあ、今の私はハイエルフでエルフマスターでレベル500で全ての装備を持っているってこと!？」

「ウン、ソウダヨ?カミサマがヨウイシテクレタヨ。」

俺の4年間で意外な形で有効活用されたのであった……

## 第1話 魔法とか初実践とか少女とか

「そういえば、魔法も、使えるのよね。」

「ソリヤモチロン。アナタノイウ「レイ」トカイウヒトヲモトニシテルカラネ。ツカツテミルノ？」

「え？まあ、やりかた教えてくれる？」

「ウン！イイヨ。」

湖のすぐ側で足を伸ばして座りながら精霊と喋っている俺。傍から見ると独り言を言ってるようにみえないか心配だが魔法は打つてみたいのでそんな周囲の事は心配しない。周りに人はいないしね。

スキルには、何種類がある。火の玉で敵を攻撃したり仲間を回復したりする【魔法】。暗いダンジョンで明かりを灯したり、水の上を歩いたりする【補助】。モンスターを召喚して速く移動したり戦闘と一緒にしたりする【召喚】。武器やアイテムを作る【制作】。居合い切りなどの【魔法】と似ている【奥義】の5種類がある。精霊によると魔法は最初に魔力を集中させると魔法が発動するらしい。多分魔力とはMPの事だろう。そう思えば「マジック・テイル」の時と大して変わらない。俺は、精霊に色々助言を受けながらも魔法を発動させる。

「ハアッ！」

「ワオッ！スゴイ！」

今つかったのは【魔法 アタッカー】である。【魔法 アタッカー】とは自分のパーティメンバーの攻撃力を上げる魔法だ。フアイア等の攻撃魔法を使ってみたい気はするが、精霊が「ワタシノイバシヨヲコワサナイデ！」と言ってきたのでステータス変更の魔

法を使っていた。自分の体がほのかに暖かくなっている気がする。  
無事成功したようだ。

「そういえば、私の持っていた装備とかって……この聖女のワンピースだけ？」

「ウウン……タシカカミサマガ【ホジヨ】ニアイテムボックスガダセルッテイッテタツケ？」

「【ホジヨ】？……ああ【補助】ね。」

精霊がカタコトで喋っているせいでちょっとわかりづらいな……。とりあえず魔力を集中させ【補助 アイテムボックス】を念じる。目の前にいかにもRPGでありそうな宝箱が出てくる。……魔

法が便利すぎて困るな。宝箱を開けて中を見てみるが、真っ黒で底が無さそうである。どうやったら防具とか出てくるのだろうか。

精霊に聞いても「サア？」だそうだ。それぐらい教えてくれよ神様、俺はエルフマスターになるのにどれほど装備を集めたか……

「マジック・テイル」の装備には全てランクがある。一番低いのがEランク、その次にD、C、B、Aと続き最上級にSランクがある。俺の今着ている聖女のワンピースはSランクである。防御

力以外のSランク装備に比べると低めだが、装備の見た目とMP消費20%カットというスキルの便利さで主に俺が気に入っている装備である。それ以外にも俺は、破魔の弓などのSランク装備をいくつか持っていたんだが……などと悩んでいるとアイテムボックスの中にいつのまにか金の装飾のされた弓、破魔の弓と矢筒が置いてある。破魔の弓と矢筒を出しながらしげしげと眺める。……うん本物だ。オリハルコンで作られた白と金の美しい弓。光属性付与の弓系の最強装備である。

「イキナリユミガデテキタ！」

「うん……すごい！」

これは本当にすごい、流石魔法！ なんでもありだな！

とりあえず一通り確認出来たためそろそろ旅に出たいと精霊に伝えると丁寧近くの町を教えてくれた。ちなみにアイテムボックスは消えろと念じるとスツとまるで幻のように消えてくれた。本当に便利すぎて言葉が出ない…… この後、しばらく森の中をさまよいつつも外に出た。森の外は草原が広がっていた。草は自分の腰ぐらいまで伸びている。正直邪魔だと思いつつ俺は、草を払いながらすすむ。とりあえず今の心配は寝るところが見つかるかどうかだその後に「魔神」のことは考えよう。「マジック・テイル」には大陸が一つしかなかった。もしかしたら「魔神」は俺が知らない種族かもしれないし、魔法だって未知のものがあるかもしれない。正直さっぱりどうすればいいかわからない。ならせめて今の世界の事を知っておく必要があるだろう。……よくよく考えればモンスターの出てくる場所で他人から見れば弓は持っているが、ワンピース一つ、素足の少女が歩いている……うん、かなり非常識だ。「靴も履けばよかったかな？」何て呟いていると男の怒声が聞こえる。

「オラア！いつまで逃げてるんだよお！さつさと積み荷を降ろせえ！」

「もう逃げられないよう？おじさあん？諦めたらあ？」

すこし近づくと馬車に乗っている太った商人らしき人が7人のいかにも盗賊やってますって感じの人達に囲まれている。あたかも近くにいるような説明をしているが、今は大体200m位の所で眺めている。【補助 ホークアイ】という職業 狩人のスキルで見

ているこれをつかいながら弓を使ってモンスターに気づかれる前に倒すという事もできる。……うーん、盗賊も人だし弓を向けるのは申し訳ないと思うが、ゆっくりと腰を低くし草に隠れて進む……盗賊と商人がまだ言い合っている……意外と盗賊は良心的かもしれない。盗賊と商人との距離は大体100mぐらいにまで近づいた。ここから当たったら普通は奇跡に近い。だが俺はハイエルフでエルフマスターでレベル500の廃プレイヤーだどのぐらい遠くからモンスターに当てられるか一人でやって350mから当たたこともあるここなら十分すぎる。静かに弓を引く。狙うは一番商人の近くにいる金棒を持った無駄に筋肉ムキムキの大男。出来ればうまく脅したいので商人を殴ろうとしたところを金棒に打ちたい。え？何格好つけてんだって？いいじゃん！ちょっとロマンじやん！

「もううつぜえ！さつさとよこしやがれ！」  
「う、うわあああ！」

そんな事を思っていると無駄筋さん（俺が命名）が金棒を振り上げるやっぱり見た目通りの短気な人ようだ。それでも冷静に素早く矢を放つ。矢はまるで引き寄せられるように金棒の上の方に当たる。

「うおっ！？」  
「ヒイツ！」

金棒は予想通り無駄筋さんの手から吹っ飛ぶ。商人はもうびびって馬車の上で丸まっている。無駄筋さんや他の盗賊は一瞬動きが止まったが、盗賊の一人が俺の方に向けて叫んでいる。流石に遠くてよく聞こえないが多分「襲撃したのはアイツだ！」とか言っているのだろう。……おっ！3人の盗賊がこっちに走ってくる。

他の4人は馬車の周りで商人が逃げないように囲んでいる。とりあえず俺は【奥義 パラライズアロー】を打つ事にする。【奥義 パラライズアロー】はダメージが与えられない代わりに当たれば80%の確率で相手が動けなくなる麻痺を発生させる事ができる。

「ウヒイツ!？」

「アハツ!？か、体がっ!？」

「……グフツ。」

走ってきた3人の盗賊がかなり個性的に倒れる……ムサイ男が「アハツ!？」とか言うなよ……なんだよ「アハツ!？」って。3人の盗賊を踏んで行きゆっくり残りの盗賊の所に歩いて行く。残りの4人は警戒しつつも俺に話しかけてきた。

「……貴様、何者だ!」

「ガツシュ達をよくも!」

「ガツシュ達って……あっちで倒れている人達の事? とりあえずここから離れたら見逃してやらないでもないわよ?」

正直精霊と話したただけだから言葉が通じるか分からなかったが俺の喋っている言葉は通じているようで、盗賊たちがまだ若いエルフに見逃してやると言われてイラついているようだ。

「……チツ、おまえら!さっさと退散するぞ!」

残りの4人は3人の盗賊を担いで走っていく……ふう、とりあえず一人も殺さずに何とかなったな。太った商人はこっちを見ている。なんか視線がとてつもなく嫌だ。表現するなら電車の中で女子高生に痴漢をする前みたいな視線を感じる……なんで分かるんだって? 私服の時は何回か痴漢を受けたことがあるからだ……

「大丈夫ですか?」

「ああ、助かりました。盗賊に見つかってしまっし、困ったものです。で、ど、どうですか？私の所に雇われてみませんか？ええ、ええお金は後で出しますよ？せめてオルアナ王国までいいのでどうでしょう……グヘヘ。」

話しかけるないなや、いきなり早口でいいまくる太った商人。

おそらく、護衛という仕事以外にも美少女なエルフと会話が出来れば一石二鳥的な事を考えているのだろう。はつきり言ってこんな奴なら助けなきゃよかったと思いつつ、おかしいことに気がついた。

「そっついえば商人さん。何でこんな人が通らない道を通ったんですか？こんな人気のないところを通っているのが盗賊に見られたらそりゃ襲われもしますよ。」

「う……そ、それはだな。この積み荷が大事なものでな、いち早くとどけなければならなかったのだよ。」

「ふーん……じゃあその大事な物をちよつと見せてください！その中身によつては雇われてあげますよ？」

「な！それはダメだ！」

「ふーん、ま、勝手に見ますけどね」

「ん？ハハハッ！嬢ちゃん面白いことを言うねえ。この馬車は今、最近出来た『魔法 硬化』を使って防御力が上がっているんだ！いくら嬢ちゃんの弓の腕がうまいからって壊れないさ。」

商人がニヤニヤしながら説明してくれた。【魔法 硬化】はその名の通り自分、もしくはパーティメンバーの一人の防御力を上げる魔法で、俺も持っているし、魔法使いがレベル5にもなれば覚えるような魔法だ。なんでそんな偉そうに自慢しているのだろうか。

「別に誰も壊すなんて言ってますんよ？」



「ん？じゃあどうやって見るんだい？」

「こうやって見ます【補助 サーチ】。」

【補助 サーチ】は、敵のモンスターや他人のキャラクターのレベルや装備などを見たり、フィールドに生えてる植物を探したりするのに使うスキルである。そしてこのスキルを使っているときは馬車の中のキャラクターのレベルや道具も見えたはずだ……【補助 サーチ】で見た物は俺の想像通りの物だった。

【アリア レベル6 エルフ 】

どうしてこんな人いない所を一人で渡るのが……多分人さらいのようなことをしたからではないかと俺は推測していた。もし違ったとしてもどうせ口くでもないものだっただに違いない。俺は素早く馬車の後ろに走る。この馬車は外から中の物がみえないように窓一つない木の箱になっていた、唯一の扉は後ろにあるのを盗賊に近づいているときに見た。そこには南京錠で扉が開かないようにされていたが、俺は南京錠に対して魔法を発動する。

「【魔法 ウイングカッター】！」

「な……！」

商人が絶句しているのを無視して南京錠を風の刃で真つ二つにして、扉を開ける。そこには、エルフ特有の長い耳、肩につくぐらの長さの黒髪、そしてぱっちりとした青い目は目を見開いている。俺は呆然としている商人の方にゆっくりと向き、今までの人生で2番目くらいの笑顔をする。

「あなたは私に人さらいの手伝いをさせる気だったんですか？」

「うつ……ゆ、許してくれ！ こうでもしねえと女房と息子を養え

ねえんだ！」

「そんないいわけは聞きたくありません。死にたくなければ早く私の視界から去ってください。」

「ひ、ひいい！」

悲鳴を上げながら、草をかき分けていく商人。俺はそれをしばらく見ていたが、その目を馬車の中の少女に向ける。

「大丈夫？」

「あ、はい。」

「どうして連れ去られていたの？」

「え、えーとですね。私は、ハイナ教国の小さな村に住んで居たんですけど、定期的に村に商人が来るんです。私が外で遊んでいたら、馬車が一台だけだつたんで不思議には思いましたけど商人だと思って近づいたらいきなり捕まえられてしまって。」

「そう、それは大変ね。」

「……そういえばですけど、ここってどこですか？」

「……それは、私も分からないの。」

「……ええー。」

黒髪の少女の呆れた声が草原にむなしく響いた。

## 第2話 初めての空の旅（少しだけ）（前書き）

視点変更が少しだけです。

## 第2話 初めての空の旅（少しだけ）

とりあえず商人の置いていった馬車に二人で乗り、精霊の言っていた町を目指す。今は背の高い草がない、物語ではよくありそうな、なにもない草原を走っていた。アリアというエルフの少女（14歳らしい）は自己紹介して馬車に乗ってからは全く会話がなかった。正直この沈黙は俺は苦手だ。しかし何か喋りたいけど、今のこの世界のことはよく分からないため何て話しかけたらいいか分からないという状態に陥っている。

「……あの。」

「ん？何？」

「今、何処に行こうとしているのですか？」

「うーん、とりあえずこっちに行けばいいって精霊は言ってたんだけどねー。」

「何処の国の町かは聞きましたか？」

「ん？知らないって精霊は言ってたよ？」

「そ、そうですか……」

なんか、アリアは俺に不安げな目を向ける。まあ、何処に行ってるかさっぱりだから気持ちには分かるが。

しばらく移動し続けてきたが、日も沈みかけてきたので、アリアちゃんと野宿の準備をする。とは言っても、馬は周りの草を適当に食べていて、俺は【召喚 ナイトウルフ】を発動していた、ナイトウルフはレベル50くらいででくるモンスターだが一回に五匹くらいで出てくる事が多く初心者キラーとも呼ばれたモンスターだ。俺は、ナイトウルフを5匹程召喚し、モンスターが来ないかどうか見張らせている。

「……あの、召喚どうやったんですか？」

「どうやったって……スキルを使ったただけだよ？」

「でも……召喚は三人がかりでやらないと出せないって……」

「え？そんなに必要なの？」

「えっ」

「えっ」

「……あなた何者ですか？」

「何者って言われても……言っなら森の中でずっと引き籠もり生活をしてたとか？」

「……とかって言われても……」

ひとまず世間知らずキャラで行けばなんとかなる！……きっと。

〵次の日〵

とりあえず、起きて商人の置いていった食料を適当に食べ、ナイトウルフの召喚を解除する。【召喚】で出されたモンスターや使い魔は大体12時間で自然に解除される。それ以外にもプレイヤ―が解除を命令すれば消えてくれる。「マジック・テイル」では攻撃を一緒にしてくれたり、空を飛べるモンスターなら乗って移動したり等は出来たが。こつちの世界ではもつと細かい命令を聞いてくれるようだ。

馬車にアリアと乗っていると大きな砦が見えてきた、ここが国境なのだろう……多分。

「……あの。」

「ん？何？」

「入るのには通行証とか必要じゃないんですか？」  
「……あーそうだよーそっだろーねー。」

俺はとりあえず捨てられていた所をおじいさんに拾われ、森の中で生活していた世間知らずなエルフという風にアリアに説明したので通行証は無いと確信しているのだろー。

「とりあえず中に入ってギルドカードでも作れば国民扱いされますのでとりあえず中に入る方法を探したいんですけど。」

「……私いくつか思いついたけど……どうする？アリア？」

「中に入る方法ですか？では言ってください。」

「……砦を破壊する。」

「……却下です。」

「な、なんでダメなの！」

「むしろ聞きますけどどうやって破壊するんですか！」

「そりゃあ、【魔法 エクスプロード】で……」

「明らかにダメです！目立ちます！」

「じゃあ、あそこで見張っている騎士を皆【奥義 パラライズアロ―】で……」

「ダメです！とりあえず目立ってもいいから他の人達に迷惑を掛けないようにしましょう。」

「うーん、ならモンスターを召喚して……」

「召喚して？」

「砦を跳び越えちゃおう！」

「……まあ、それでいいです。」

アリアはとても重いため息を吐いていた……流石に誘拐されて、いきなり見ず知らずの人と旅をしているのだつかれが貯まっているのだろー。俺は、とりあえずアイテムボックスを喚びだして、破魔の弓と矢筒を入れる。そしてアイテムボックスの中から純白の

杖を取り出す。この杖はシャイニングワンドというSランクの装備である。魔法攻撃力の高さと同復量の増加、光属性の魔法の威力上昇といった能力を持っている。何故破魔の弓からこっちに変わったかつて？ 破魔の弓は、矢筒も一緒に持たなければいけないから重たいという微妙な理由なので気にしない事。

「【召喚 ペガサス】」

「はい！？」

なんかアリアがとても驚いているがそれを無視して真っ白な翼の映えた白馬が現れた。おお、現実で見るとなかなか格好いい！ペガサスは一年に一週間しかおきないイベント「伝説の駿馬を探せ！」でしか出てこないボスモンスターである。HPは高いし、上級魔法をガンガン浴びせてくる、そのくせ本人はよく逃げるとめんどくさいモンスタートップ10には入るくらいのモンスターである。

「ほ、本物？私、物語でしか聞いたことが無いんですけど……」

「本物、本物。さあ！乗って乗って！」

私が素早く跨がってその後ろにゆっくりとアリアが乗る。……ちなみに馬車は置いというて、馬車を引いていた馬は私の使い魔扱いになってましたよ、商人から盗った時に捕獲した事になったのだから？

「うわ！本当に空を飛んでる！」

「そうだねー。」

ペガサスで空を飛ぶと風が直に当たり中々気持ちいい。しかも俺は、飛行機にすら乗ったことがないのでとてもなく興奮していたが、アリアはかなりおびえているようだ。

「見て見て！砦があんなに小さい！」

「ちよっ！こんなに高く飛ばないでください！砦を越えるだけなんですからもっと低く飛んでください！」

俺はもつと飛んでいたい、アリアがあまりにもおびえて俺の体に抱きついて胸とかかくついているので、砦を越えて、一気に高度を落として地面に着地する。

「空の旅楽しかったじゃん？」

「こ、こんなのだったら、本当に砦を壊した方がよかったかもしれない……」

「もう、そんなにすねないで、ね？」

涙目になっているアリア……中々かわいいなあと思いつつも二人で国境沿いの町に歩いて進む。ペガサスは目立つから召喚解除した方がいいとアリアが主張するので召喚解除しておいた。

視点変更レイ レオード

「ふむ、では行ってくる。」

「了解しました団長！このルードの町は必ずやお守りいたします！」  
「ハハハ！その調子だ。」

私は、今オルアナ王国の国境沿いの町ルードにいる。今日、私の部隊任務は、ハイナ教国とオルアナ王国の間にあるアルネの森周辺の調査だ。

アルネの森は、戦争の後100年間足を踏み入れた者を返さなかったという魔の森としても知られている。その理由は異常な程レ



ベルの高いモンスター達が原因である。そのせいで、今もどちらの国の領域になっていない森だ。私の部隊はその森に足を踏み入れる予定はないがアルネの森からモンスターが出ていないか周りを調査するのである。

「ルブラ隊長！あ！レオード団長も！」

「うむ、どうした！」

「砦をモンスターが飛び越えてオルアナ王国に入りました！」

「何！何故止められなかった！」

「そ、それが。そのモンスターがペガサスでして……」

「……ペガサス！？」

ペガサスは100年前の戦争の話にも出てくるモンスターである。飛びながら魔法を使い、空から雷を降らせて騎士や冒険者達を苦しめたという。そんなモンスターがオルアナ王国に入った！？

「もし、王都に入れたら！大問題になるぞ！急いで騎士を集めろ！ペガサスを探して討伐しろ！」

絶対に、王都には入らせん！

**第3話 今後の作戦会議 それと騎士団長と遭遇（前書き）**

見てくれた方、こんな文章ですがありがとうございます。

### 第3話 今後の作戦会議 それと騎士団長と遭遇

さて、俺達が街に向かって歩いているとなんかジャラジャラと装飾がしてあるいかにも騎士の偉い人だという感じの鎧を着ている人が後ろのたくさんの騎士を連れてこちらに向かってくる。

「何しに行くんだろうね？」

「……あの、レイさんものすごく嫌な予感がするんだけど。」

「え？何？アリア悪いことでもしたの？」

「してません！」

アリアがそんなに悪い子だったなんて……そんな事を思っていると、派手な騎士がこちらに気付き近寄ってきた……え？何？ナンパ？だったら一瞬で火の海にするよ？

「すまない、そのエルフのお嬢さん方。」

「うわ！鎧が喋った！」

「鎧なんですから中に人が居て当たり前じゃないですか。何言ってるんですか。」

うーんアリアの突っ込みは中々厳しい。派手な騎士が唐突に兜を脱ぐと俺たちに挨拶を……うわ！若！そしてイケメンな金髪のエルフであつた。

「すまない、自己紹介が遅れた。私はオルアナ王国騎士団長のレオーナだ。」

「え！えーと、アリアです。」

「レイです。」

アリアは騎士団長だと知った瞬間なにやら緊張しているようだ。  
とりあえず俺はこの、騎士団長を【補助 サーチ】でステータス  
を見る。

【レオーナ エルフ レベル60 剣士】

騎士団長だというのにそんなにレベルが高くないんだな。もっ  
と200位はあると思ったが。

「そんなに強くないんですね。」

「えっ？」

あ、口が滑った。

「ちょ、ちよつとレイさん！何言ってるんですか！」

「貴様！団長のレベルがいくつか知っているのか！」

騎士団長の隣にいた部下らしき人が話に入ってきた。

「うん、一応レベル60だよな？」

「レ、レイさんそんなけんか腰にならなくても。」

「ハハハ！おもしろい嬢ちゃん達だ！」

騎士団長が、豪快に笑っている。クソツイケメンめ……

「ところで、騎士の方々がこんな大所帯で何しに行くんですか。」

「ああ、そうだ。君たちに聞きたいんだがこっちでペガサスを見  
かけなかったか？」

「ペガサス……ですか？」

……こつちを見ないでくれアリアよ。

「ああそうだ、ついさっき騎士達にペガサスが砦を乗り越えて王国内に入ったと報告があった。君たちも何か知っているか？」

「知っているというかなんというか……その。」

「ペガサスを召喚したのは私ですけど……」

「……へ？」

騎士達が変な声を上げる。アリアは、小声で「……もうどうでもいいや。」と呟いていたのは聞かなかったことにしよう。

「やはり愉快的な冗談を言うお嬢さんだ。召喚なんて君みたいな若い子二人いても出来ないよ。」

「じゃあ、見せ「すみません！ペガサスについては何も知りません！ごめんなさい！失礼します！」

アリアに声を遮られ引つ張られて猛ダッシュで騎士達から離れていくのだった。

「なんでそんなに急いでいるのよアリアは。」

「不法侵入したって事を堂々を言っているようなものですからね！」

「あ、そっかあ。」

全然気づかなかった……

しばらく二人で歩いていると、街の門が見えてきた。この街は国境側は警備が厚いが国内からはかなり簡単に入れた。

「ここからどうするんですか？ レイさん。」

「うーん、とりあえず宿屋を探しましょうか。」

「……お金は？」

「お金……」

お金は今手元にはない。    とりあえず【補助 アイテムボックス】  
で中にお金がないか確かめる。

「あ、あつた！」

「……なんかジャラジャラはいつてますね。」

…… アイテムボックスの中に直接硬貨が山ほど入っているとどう  
見ても宝箱にしか見えない。    アリアがアイテムボックスの中から  
一つ取り出す。

「……本物ですね。」

「アリアこれで宿屋には泊まれる？」

「こんなに金貨がたくさんあれば一生泊まれるんじゃないですか。」

「……とりあえず聞くけど、この銅貨と銀貨と金貨となんか白い硬  
貨と石で出来てる硬貨は大体いくらくらいかな？」

「うーん、石貨は1G、銅貨1枚で100G銀貨1枚で1000G、  
金貨1枚で10000G。    そして白い硬貨は白金貨といって10  
0万Gなんですけど…… 国同士の貿易くらいでしか見れないような  
代物ですよ。」

「マジック・テイル」ではお金は左上の方に100Gという感じで  
出ているくらいだったのでよく分からないが、神様が俺が持つて  
いたお金を全て金貨とかに替えたのかもしれない。

「うーんつまりいっぱいあるっていう事？」

「……すごいまとめ方ですね。」

とりあえずアイテムボックスから金貨を数枚出して商人が置いていった袋にいれる。

「一応銀貨1枚あれば家族で一ヶ月は暮らせますよ。」

「へえー。」

「っていうか門の近くでこんなにお金を見せびらかさないでください。」

「誰もいないからいいじゃない。 ささ、早く宿屋に行こう！」

……そろそろ思ったが俺は世界観以前になんか非常識になっている気がする。 浮かれすぎだろうか？

この街はレンガ造りの家が国境側の門から続く道に沿って建っている。 街の至る所では露天が開かれていてそこで、国境から出る人のための道具がたくさん売られているようだ。

俺とアリアは二人で歩きながら通行人に宿屋の場所を聞いて、向かう。

着いた宿屋の名前は「冒険の巢」。 ギルドに所属してモンスター退治などを仕事とする冒険者達が多く泊まる宿だそうだ。 宿屋に入るといかにも宿屋にいる気の強そうなヒューマンの女主人がいた。

「いらつしゃい！珍しいねえこんなか弱いエルフのお嬢さんかお二人とは。」

「すみません。 泊めてもらう事はできますか？」

「ワンルームでいいのかい？」

「はい。」

「何泊するんだい？」

「とりあえず一泊ですよ。レイさん。」

「うん、そうだよ。」

「二人で一泊……600Gになるけどいいかい？」

「はい！」

俺は袋から銅貨を6枚だし、女主人に渡そうとしたが女主人はなんか驚いた顔をしている。

「あんたらどうやってたらそんなに金貨を手に入れられるんだい？  
どこか有名な貴族の人なのかい？」

「いいえ。ただの世間知らずです！」

「そうかいそうかい。中々おもしろいお嬢さんだね。名前は？」

「レイです。そして隣にいるのはアリアです。」

「そうかい。じゃあ部屋に案内するよ。」

女主人は機嫌良さそうに笑いながら、二階に上がり。 104と

札の付いている部屋の前まで案内し、部屋の鍵を渡す。

「ここは、荒くれ者の冒険者も多いから何かと気をつけなよ。後、

朝食は八時、昼食は十二時、夕食は二十一時って決まっているから  
食べたければ下の食堂に来な！ いらなければ来なくていいから。

「

はい！ありがとうございます。」

女主人が降りてから部屋に入る。中は机が一つ、椅子が一つ、  
ベットが二つ、タンスが一つ、そして壁に時計が一つ掛けてあると  
いうシンプルな部屋。俺とアリアはベットに座ったら、アリアが  
話しかけてきた。



「レイさんはどうしてそんなに、すごいんですか？」

「すごいってどんな風に？」

「どんな風につて……お金をいっぱい持ってて、とても強くて召喚を一人で出来る。そんな人いまじゃおとぎ話にしかないですよ。」

「

「ふふふ、実は100年前から来たのだ。」

「そのほうが信憑性あります！」

「とりあえず目的はあるんだよね。」

「どんな？」

とりあえずアリアに精霊に言われた「魔神」の話伝える……まあ、異世界から来た、というのはうやむやにしたが。

「それで何がしたいんですか？」

「とりあえず国の偉い人とかに伝えられたらな」と思って。」

「多分オルアナ王国は無理ですよ？」

「えっ？」

オルアナ王国？……ああ、そういえばレオーナとか言う人がオルアナ王国所属とか言ってたっけ。

「今、オルアナ王国はヴェルズ帝国と戦争寸前なので、そんな話は聞かないと思います。」

「大陸の危機なの？」

「そんな信憑性のない話より。目の前の問題を第一に考える筈です。」

「確かに。」

「なのでとりあえずハイナ教国に行った方がいいと思います。あそこはエルフ族がほとんどの国なので、オルアナ王国よりは話を聞

いてくれると思いますよ。」

「ふむ、なるほど。なら明日に、また砦を飛び越えなくちゃいけないかあ。」

「……まあしょうがありません。」

アリアの顔が青くなっているが、中々かわいい等と思っていると女主人がやってきた。

「ああ、そうだお嬢さん達、もうお風呂入れるから、さっさと入ってきた。旅で疲れたろう。」

……えっ？お風呂？

#### 第4話 少女の回想と男の娘の苦悩（前書き）

最初はアリア視点 その後レイ視点になります。

## 第4話 少女の回想と男の娘の苦悩

視点 アリア

私は絶望していた。

私はハイナ教国にある小さな村の教会の神父の娘。 神父はハイナ教国では地位の高い役職であり。 村の中では他の家と比べて裕福な方だったがお父さんはそのお金をいつも村のために使い、国からも村からも信頼されている人だった。

しかし、村の入り口の近くで一人で遊んでいたら。 人さらいに攫われてしまった。 真っ暗な馬車の中でこの後どうなるのか不安だった。 オルアナ王国は奴隷制がないので多分ヒューマンを第一とし、他の種族を奴隷にしたりしているヴェルズ帝国に送られてしまふのだろう。 そう思いながら、後悔していた。 どうして一人で遊んでいたのだろう、どうして商人だと思いついてしまったのだろうと。 感じているのは振動だけ。 他は何も感じない、真っ暗、音一つない。

しかし、いきなり目の前が光で満ちた。 誰かが馬車の扉を開けたのだ。 最初は、ヴェルズ帝国にでも着いたのかと思ったが違った。 目の前には銀髪で白いワンピースを着ていて真っ白で金の装飾の施された弓を手に握っているエルフの女の人…… エルフは二十歳になるまではヒューマンと同じように成長するので大体17歳くらいだろうか？ 彼女はその後人さらいと口論をし、人さらいが逃げ出していった。 そして彼女は私に手を差し出してこう言った。

「大丈夫？ 私はレイ。 あなたは？」

私にとって彼女は姫を救うおとぎ話に出てくる王子のように見えた。……まあ、世間知らずな所もある人だったが、彼女が召喚をしたのには驚いた。【召喚】は100年前の戦争の時には一人でも出来たらしいが、今は4、5人が命をかけて使わなければいけないらしい。彼女はそんな事を気にせず【召喚】を5回汗一つ流さずしてんのけた。ちなみに何故【召喚】が命がけになったかと言うと戦争の時に人々が殺し合い魔法が使える人や奥義を使える人……様々な技術が失われたらしい。今はなんとか持ち直したらしいが100年前には何もかも劣るらしい。しかもその後には伝説にしか出てこないようなペガサスすらも出した……飛んだときは気絶しかけたよ……

色々と破天荒で世間知らずちょっと天然も入っているが彼女は嫌いにはなれない。なんだかんだ言っただけで彼女を私は信賴していた。精霊から聞いた「魔神」の話というのもすぐに納得してしまった。彼女に私はメロメロなのかもしれない……別に好きって事じゃないからね！

視点変更    アリア    レイ

「お風呂ですか、いいですね。」

風呂……女主人から聞いたその言葉に俺はふつと答えた。

「じゃあレイさん一緒に入りましょうか。」

「そうね一緒に……えっ？」

一緒に……だと。

「あれ？レイさん公衆浴場とかには入った事ないんですか？」

「え？……ええ。」

しまった、俺は今女だった……という事は。

「アリアと一緒に入るっていう事？」

「それ意外に何があるのですか？」

……そういえば中学の頃修学旅行で班決めの時、女子の班に入ることになった事があった。女子達が勝手に班を決め、先生に決まったと伝えたらしい。俺は最初女子の班になっても先生がおかしい事に気づくだろうと思っていたが何故か採用されてしまい女子と部屋を同じにするという出来事があった。しかも女子は俺を女子風呂に連れて行こうとし、俺がなんとか抵抗して男子風呂に入ったが、その時男子から。

「なんで女子が……って陸は男か。」

つと言われ傷つきうなだれていたところ女子は男子がやらしい事をしたと勘違いし、俺のクラスがなにやらアメリカとソ連みたいな状態になった事があった。

あのときとは違い俺は女の子だ。それもかなりかわいい。だが心は男だ！

「ちょ、ちょっと。二人でっていうのは……」

「？別に大浴場だから大丈夫だよ？もしかして小さな風呂だと思ってたのかい？」

ちょ、ちょっと何言ってるんですか！ それじゃアリアと……いやむしろ最高じゃね？ いやいやいや！

「私とでは、ダメですか？」

「うっ……」

何でそんなにかわいい顔で上目遣いをしてくるんですか！ こ、これでも俺は男で……

「わかりました。 入りましょう。」

「はい。」

俺の男というプライドが軽く砕けた気がした。

風呂は宿屋の一階のロビーの奥にあった。 風呂は、男と女で分かれており木製の扉で分けられていた。 こういうのを見るとのれんを懐かしく思ってしまう。 そして当たり前だが女の方の脱衣所に今居る。 ちなみに冒険者は男と女の比率が9対1くらいらしい。そしてこの宿は冒険者しか泊まらない為女風呂はめったに人が入らないらしい。

「？ レイさん、どうかしました？」

「い、いいえ。 何でもないわよ。 何でもない。」

「？ そうですか。」

スルスルとアリアの服が擦れ合う音が聞こえる。

「そういえばアリアの服とても汚れてるわね。 私の服貸そうか？」  
「えっ？ いいんですかありがとうございます。」

しまった！ アリアの服がやけに汚れているのに気付きつい声を掛けてしまったが。今アリアは全裸じゃないか！ アリアの体は健康的な体をしており胸は少し控えめだが形がいい……中々いい体だ。

「レイさん、早く服脱がないんですか？」

「え、ええ。他の人（女性）と一緒に入るのって初めてだから。」

「へえー森の中では一人だったんですか？」

「まあね、ずっと一人でしたよ。」

そういえば森の中でひきこもりっていう設定でした。自分で忘れていたよ。さてずっとウダウダしていてもしょうがない意を決してワンピースを脱ぐ……あれ、ワンピースが胸に突っかってうまく脱げない。

「もう、何してんですか。レイさん。」

アリアが脱ぐのを手伝って……目の前でアリアの裸体を直視しました。

「ご、ごめんなさい。」

「何がですか？ そんな事より早く風呂に入りましょうよ。もう7日間が入ってませんから。」

「……ああ、人さらに攫われて。」

「……ええ。」

服が汚れていたのもそれが原因か……

「まあ、じゃあ7日間分入りましょうか。」

「レイさん……はい！」



アリアの笑顔がとても眩しかった。ちなみに、アリアと洗いました。とてもスベスベだったよ！

夜、部屋に戻りネタ装備のパジャマを二人で着る。ちなみにアリアの服と俺のワンピースは女主人が洗ってくれると言っていたが自分たちで洗って部屋で乾かしている。

「この服とかどう？」

「……何でこんな位の高そうな服しかないんですか？」

「えーいいじゃない女神官の服。」

「私、父が神父ですけど、父もこんない服着てませんよ。」

「え、あなたの父さん神父なの？」

「はい、ハイナ教の神父です。」

「ハイナ教？確か明日行く国の名前って。」

「はい、ハイナ教国です。エルフの人は大体ハイナ教ですよ？」

「へえー例えばどんな教えがあるの？」

「例えば、食事の時は殺された者に謝罪と感謝をしなさいとか。」

「常識だね。」

「ですが、エルフ以外の人種は殺されて当たり前だという事を言いますから。」

「へえー あ、この服はどう？」

「さっきのに比べればマシですが……」

「どう？魔導院の制服だけど。」

「魔導院……100年前にあったといわれてる魔法の学校ですね。」

「今はないの？」

「今じゃあ魔法を使えるのはごく一部の人だけですから……っっていうかこんな服もどこで手に入れたんですか？」

「内緒だよ。」

「内緒ですか……まあこの服にします。」

「うん、一応Bランクだから大切にしてください。」

「Bランク……ですか？ 騎士の人も滅多に着れませんよ。」

魔導院の制服は分かりやすく言えば黒と赤のセーラー服のような感じの服である。デザインがいいと評判のBランク装備の一つだ。まあ、魔導院の依頼を500回以上やれば誰でももらえるから別に特別珍しいって訳じゃないけどね。

「捨てないでね。」

「捨てませんよこんな高そうな服。」

アリアがその服を割れ物でも触るかのような扱いをしており少し笑ってしまった。

追記 服を買う女子の気持ちが少し分かってしまった俺だ。

## 第5話　ちよつとした寄り道？

朝、目を覚ましたらアリアが目の前にいました。……うん、ちよつと落ち着こう。確か寝た時は別々のベットで寝てたはずだ。

「ん？あれレイさん何で私のベットにいるんですか？」

「それ、こっちのセリフです。」

「え？ああ！本当です！すみません！」

アリアが慌ててベットから出る……微妙にパジャマがはだけているのがエロイ……イカンイカンなんか興奮してきた。

「とりあえず準備しましょうか？」

「は、はい！分かりました！」

乾かしていたアリアの服をたたむ。アリアの服の汚れは落ちたが、所々破けており、やはり着れたものではなかったので魔導院の制服をアリアは着た。俺はワンピースの皺を伸ばし、着る。

「おや、もう行くのかい？」

「はい、ありがとうございます。」

「別に感謝される事はないよ。これが仕事だからね。」

「じゃあ、アリア行こうよ。」

「はい！」

「冒険の巣」を離れループの町の街道に出る。昨日に比べると人が多く、露天も賑わっている。町には冒険者らしき格好の人や行商人のような格好の人が多く見られる。

「……レイさん、私の格好かなり目立ちますよ。」

「可愛いからいいんじゃない？」

「可愛いからって……一応王国から違法で出る前ですよね？」

「だからといって。コソコソするのは私には出来ません！」

「断言しないでくださいよ……この服予想以上に下がスースーするんですけど。」

「ミニスカート穿くの初めて？」

「スカートはいつも穿いていたんですけど、ミニスカートを穿いている人は数える位しか見たことないです。」

「じゃあ、初めての経験って事でいいじゃない！」

「まあ、そういうことでいいのかな？」

二人で露天を眺めながら国境の反対側の門へ向かう。

「あ、ポーション売ってる。」

「ポーションはもってないんですか？」

「生ものはアイテムボックスに入っていないよ。腐らせると大変だからね。」

「レイさんは入れたらそのまま忘れそうですね。」

「アリアはいちいちメモとか取ってそうね。」

「そこのお嬢さん達ポーションを買うのかい？」

露天の商人が意外そうな顔をして聞いてくる。多分こんな軽装（見た目は）の美少女（俺基準）二人が露天で冒険者や商人しか買わないような物を見ながら会話していたからだろう。ちなみにポーションなどの生ものがアイテムボックスに入っていない理由は神様がアイテムボックスの中の生ものがあると知らずに腐らせて、においが大変になりそうだから。というかなり現実的な理由で生肉などは抜いたらしい。

「じゃあ、ポーションを50個ください。」

「えっ!？」

「レイさん、その人そんなにポーション売ってないですよ。」

「うーん、まあないならいつか別に関わなくて。」

「……レイさんの金銭感覚中々スゴイですね。」

「いや、回復魔法も使えるし別にいいかなって。」

「一応言っときますけど、回復魔法を使えるのは十人もいませんよ。」

「

「え?そんなにいないの? 昨日の夜に魔法を使える人は少ないって言っていたけど、どういうこと?」

「それはですね……」

「ちょ、ちょっと待ってくれ!お嬢さん達!」

ちよつと大事な話がされそうな時に露天の商人が話に割って入ってきた。意外と気になっていた事だったので不機嫌気味に答える。

「何ですか? 個人的には大事な話の途中だったんですけど。」

「いや、お嬢さん回復魔法が使えるって言っていたよな!」

「まあ、使えますけど。」

「俺の妻が病気で、ポーションじゃあ直せないんだ! なんとか治してもらえないか!」

「ポーションで、直せないのに回復魔法なら治せるって言うの?」

「……確かに、薬じゃあ直せなかった病が魔法で治せたって話は聞いたことがありますけど。」

「報酬はいくらでも出す! だから治してくれないか!」

「一応……やってはみましようか。」

「レイさん、いいんですか?」

「いいも何もここまで頼まれちゃやるしかないでしょ。」

「ありがとうございます! あのいますぐでいいかお嬢さん達。」

「ええ、かまわないわ。」

商人が露天を片付けると、街道の家と家の間の脇道を三人で移動する。

「……迷路みたいね。」

「はい、ハイナ教国にはこんな道は少ないですから私も初めてです。」

「迷ってしまいそうだね。」

「はい、道を覚えるのに大変そうです。」

「まあ飛べば何とかなるけどね。」

「……それはあくまで最終手段ですよ。」

「ま、この後その最終手段を使わざる得ないけどね。」

「……そうでした。」

「着きましたよお嬢さん達。」

着いた家は周りの家と比べても見た目は大して変わらないレンガ造りの家だ。家の中に入るが、写真で見たようなヨーロッパの家を彷彿とされる部屋だ。その家の二階の部屋に寝ているヒューマンの女性がいた。

「……アイナ、回復魔法が使えるという人を連れてきた。」

「回復魔法？ どちらさまですか？」

「レイです。そしてこちらが共に旅をしているアリアです。」

「どうも。」

目の前の女性は見て分かるくらい弱っている。目の下には隈が出来ており。顔が青白い。手が常に痙攣しておりいつ死んでもおかしくないというのは誰が見ても分かる。

「……若いわね。本当に使えるの？」

「ええ、一応は。」  
「……そう。」

とりあえず、俺は目の前の女性に【補助 サーチ】を使う。

アイナ            レベル15    ヒューマン    町人

ステータスをもっと細かく見たいと念じる。

HP    23 / 300    MP    30 / 30    状態異常    病

病? 「マジック・テイル」にはなかった状態異常だ。    とりあえずアイナの震える手を握り、全ての状態異常を治し、HPを回復させる【魔法 フェアリーライト】を使う。    アイナを光が覆う。

HP    300 / 300    MP    30 / 30    状態異常    なし

「どうですか?」

「ええ、こんなに体が軽いのは3年ぶりです。    ありがとうございます。」

「いいえ、私ができることをただけです。」

正直言っと思っていた以上に簡単にできてしまい少し拍子抜けだった。    しかし状態異常病とはなんなのだろうか?    後で調べないとな。

「レイさん、治療終わりました?」

「うん、出来たよ」

「も、もうですか!お嬢さん!」

「そうですよアイガ。    この人は私の命の恩人です。    感謝しても

仕切れません。」

「いえ、出来る事をただけです。　たいしたことはしていません。」

「レイさんってほんと何でも出来るんじゃないですか？」

「いやいや、流石に出来ない事はあるよ？」

「とりあえず、何かお礼をさせてもらいたいのですが……」

「うーん、なら……この事を他の人に話さないでくれるかな？」

「え、それだけですか？」

「ええ、それだけです。」

いわれると面倒臭くなりそうだしね。

「分かりました……何か用事があるのでしょうか。　このことは黙っておきます。」

「うん、よろしく。」

とりあえず、アリアと二人で家から立ち去るが何故かアリアは不思議そうな顔をしている。

「どうしたの？」

「いえ、ちよつと意外というかなんというか。　もうちよつと堂々と治したんだぞ……ってアピールするかと思いました。」

「……そうしたい気持ちもあるけど。　自慢したら病人がたくさん来て今後の事に支障をきたすと思ったの。　そうしている内に「魔神」が来たら色々と大変じゃない。」

「意外と考えていたんですね。」

「むしろ私は、アリアに何も考えていないと思われていたのね……」

「いえ、そういう意味で言っただけじゃ。」



「お母さんは、悲しいわあ。」

「あなた私のお母さんじゃないでしょ！」

「ところで、アリア一つ聞いてもいい？」

「何ですか？」

「……ここ、何処？」

「なんの確信もなく歩いたんですか！？」

「てっきりアリアが道を覚えてると思ってアリアに付いていったら……」

「レイさんが何の迷いもなく進んでいるとおもっていたのに……」

周りにはレンガ造りの家、正直景色がさつきから変わらない……  
こうなれば。

「空を飛ぶしかないかな。」

「ま、まだ歩きましょう！ 出られるはずですよ！……きつと。」

こうして俺たちは脇道をまだまだ迷うのであった。

## 第6話 迷子になって見つけた物は……

迷って大体30分近くたった気がする。景色はさっきから変わらないが、ちよつと奥地に行っているような気もしなくもない。

「うーん、完璧に迷ったわね。」

「ま、まだいけます……。」

アリアの声が震えている。そんなに空を飛ぶのがそんなに嫌なのだろうか？ アリアを少し心配しつつも二人でその後も歩き続けるとふと鈴の音が聞こえた。

「ギロチンの音！？」

「なんですか？ それ。」

しまった。このネタはアリアには分からなかったか、当たり前だけど。とりあえず音源を探すと、路地のさらに狭い細道に黒猫が一匹こつちを見つめている。その黒猫はちっちゃな黒いコートのようなものを着ていて野良猫ではないようだ……。もしかしてこの猫は。

「黒猫さん？」

「はい？ ああ黒猫がいますね。」

「黒猫じゃないよ！ 黒猫さんだよ！」

「それって重要な所ですか？」

「うん！ とつても重要だよ！ あの子使い魔だもん！」

「えっ！ っていつか何でそんなに目がキラキラしてるんですか。」

黒猫さん……。俺が、「マジック・テイル」をしていた頃手に入ら

なかった使い魔の一つだ。 使い魔は、使い魔専門の店で契約をすることで【召喚】をすることが出来るようになるのが大体だ。 だが他にもイベントや依頼、で使えるようになる物等もいる。 黒猫さんはその後者にあたる使い魔なのだが入手条件がかなり厳しい。

黒猫さんは一年に一匹「マジック・テイル」のどこかに出現し、それを捕まえば使い魔として使えるという使い魔の為手に入れられるのは運以外のなにものでもない。 黒猫さんは闇魔法が使える後方からの援護にはとても便利である。 あとさらにプレイヤー達を魅了させたのが【補助 変身】という一部のモンスターしか持っていないスキルを持っていて、戦闘には関係ないが黒い服をきた12歳くらいの美少女になることが出来て、一部のプレイヤーは血眼になって探しているという噂を聞いたことがある。 はっきり言おう。

黒猫さんが欲しいです！

その、黒猫さんが細道の奥に逃げる。

「あ！待って！黒猫さん！」

「ちょ、ちよつと！ レイさん待ってください。」

俺の制止を無視して黒猫さんはどんどん奥に進む。 まるでどこかに誘おうとしているように……

「レ、レイさん……ちょ、ちよつと待って。」

「あれ？アリア顔が赤いよ？ 大丈夫？」

「レイさん、足……速すぎ。」

黒猫さんを追いかけたが、アリアが息を切らしてしまい、二人で休憩する。 どうやらこの体は、身体能力もレベル500相当になっているらしく、ちよつと動いた程度では何ともない。

「あれ？レイさん。」

「ん？何？」

「黒猫さんがこっち見てますよ？」  
「え？」

俺が、後ろを振り向くところらをジーツと黒猫さんが眺めていた。  
なんだかその眼は俺に何かを期待しているようにも俺は感じた。

「黒猫さん、黒猫さん。」  
「？」

黒猫さんに呼びかけると首を傾げた……中々かわいい。

「何G渡せば捕まってくれる？」  
「買収ですか！？」

黒猫さんは首を横に振る……やはりダメか。

「じゃあどうすれば捕まってくれる？」  
『おにじっ』  
「お、鬼ごっこですか。」  
『私を、どうやってでもいいから捕まえて見せて。』

どうやら黒猫さんはテレパシーが使えるようだ！

「どんな方法でもいいのよね？」  
『うん。』  
「じゃあ行くよ！」  
「レ、レイさん……本気でやるつもりですか。」  
「もちろん！」  
「少しは町の事を考えてくださいね。」

「多分壊さないようにはするよ。」

「絶対に壊さないでください！」

黒猫さんが素早く走って俺たちから遠ざかる。

「アリア！黒猫さんを追って！」

「え！？はい！レイさんは？」

「色々と用意をする！」

「分かりました！」

アリアが黒猫さんの後を追いかける。こういう時には色々と聞かずに行動してくれるのはアリアのいい所の一つだろう。俺は、アリアが走っていくのを見た後に準備をするのであった。

視点変更 レイ アリア

レイさんは準備をするといっていたが。何をするつもりなのだろうか……。とりあえず町を壊さなければいいが。

黒猫さんはまだ路地を走っていく。正直付いていくのがのがやっただ。

「うわっ！」

路地を曲がったところで黒猫さんがこっちに飛んできた。そのまま私を踏んでジャンプで家のベランダに登る。レイさんなら普通に空中を歩くぐらいならやってのけそうだが、私はそんなことできないはどうしたものかと悩んでいると。いきなり路地をふさぐかのように蜘蛛の巣のようなものが二つ張られる。

『何！？』

「つゝかゝまゝえゝた。」

「レイさん！ いったい何ですか！ この蜘蛛の巣は！」

「ん？ トラップスパイダーの巣よ？」

トラップスパイダー……それは人くらいの大きさの蜘蛛であり、このモンスターのいる森は落とし穴や蜘蛛の巣といったトラップを大量に仕掛けることで有名なモンスターで騎士の部隊がトラップスパイダーの居る森に行くと3分の1は殉職するほど危険だそうだ。

『だが、まだ。』

「言っておくけど。 空にはシムルグがいるわよ？」

『えっ。』

「はい！？」

シムルグはおとぎ話にしか出てこないペガサスと同じくらい現実にはいないだろうとすら言われているモンスターだ。 話の内容は大体世界の始まりからいる鳥だとか…… 正直レイさんならもしかしたら召喚出来るかも……と思う気持ちもある。 そんな事思っていると、ふと空が暗くなる。 ゆっくりと顔を上げると目の前には軽く家よりも大きい鳥が……

「本物ですか！？」

「アリアまた驚いてるの？ ペガサスを見ても驚いていたじゃない。」

「そりゃあ驚きますよ……」

準備ってこれのことですか……レイさん。

「さあーて、私の使い魔になってもらおうかしら？ 黒猫さん。」

『……わかった。』

レイさんの目的の黒猫さんは彼女の使い魔になることを決めてくれたようだ。……まあ、シムルグまで召喚されれば認めてるしかないだろうけど。

「つていうかレイさんどうやって追いついてきたんですか？」

「ん？シムルグに乗ってねー。アリアの姿を探したんだよ。」

「単純で恐ろしい探し方ですね。町とかは壊してませんよね。」

「もちろん！ 騎士とかに攻撃されたりしたけど町を壊しては居ないよ！」

「攻撃されたんですか！？」

まあこんな大きいモンスターが町に出たら攻撃するよね。 騎士だもん。

『あなたがじゃれ合ってる内に契約が終わりましたよ。』

「おお、やったー！ ありがとう黒猫さん！」

「じゃれ合ってるって……」

さつきからそんな風に見えてたんですね。 というか黒猫さん時々毒舌ですね。

「……というかシムルグさん目立って騎士が来ちゃうんじゃない？」

「あつ。」

「考えてなかったんですか！？」

「ついつい黒猫さんに意識が向いちゃって……テヘツ。」

「テヘツじゃないですよ！ どうかして早く町から出ないと。」

『町から出るだけならシムルグに乗って出ちゃえば？』

「それだ！ ナイス！ 黒猫さん！」

「……もう飛ぶ事は決定ですね。」

もう、覚悟は決めよう。遅かれ早かれ空を飛ぶんだし。

「ところでどうやってシムルグに乗るんですか？」

「そりゃあ、空中を歩いてシムルグに……」

「やっぱ歩けるんですね。」

「やっぱ？」

「……いえ、こつちの話です。」

「じゃあ、早速行こう！」

「え、ちょ、ちょっと!？」

レイさんに俗に言うお姫様抱っこの状態で抱えられる。そしてそのままゆっくりと空中を階段があるかのように歩き出す。第三者の視点で見ると絵にはなるだろうが、当事者は中々恥ずかしい。ついでだが私の腹の所に黒猫さんがベランダからジャンプしてきた。こうして見ると背中についている小さなコートと合わさって中々かわいい。そして、ゆっくりとシムルグの上に乗ったら私と黒猫さんを下ろした。

「よし！出発進行！」

「は、はい！」

『……空を飛ぶのは初めて。』

シムルグがゆっくりと翼をはためかせると下の路地が風ですごいことになっているのが見えるが今は気にしないことにしよう。そして一気に飛ぶ。その頃、ちょうど下に来た騎士達が吹っ飛ぶ。うん、今は気にしない気にしない、多分死んでないから大丈夫。



そして、シムルグは悠々と砦を越えるのであった。

## 第7話 空の旅とアリアの歴史の授業

視点変更 アリア レイ

シムルグで国境から離れる。 アリアは地上を見ないようにして  
いるのがかわいらしい。

「ねえ、黒猫さん。」

『何?』

「黒猫さんは召喚解除されないの?」

『何で?』

「ん?」

確か【召喚】の使い魔は契約した直後に召喚解除して消える筈だ  
(確か)。

「じゃあ、黒猫さんはいつ召喚解除するの?」

『むしろ召喚解除されなくちゃいけないの?』

「え、じゃあ半日で強制解除されるまで待つ?」

『強制解除?何それ?』

黒猫さん曰く強制解除はないそうだ。 そこら辺は「マジック・  
テイル」との違いがあるようだ。

「じゃあ、黒猫さんはずっと一緒にいる気なの?」

『悪い?』

「いや、悪くないけど。」

「と、ところでレイさん……」

「ん?何?アリア。」

顔が真っ青になっているアリアが俺に話しかけてきた。

「何処までシムルグで行くつもりですか？」

「うーん、とりあえず国境まで？」

「やっぱり飛び越えるんですか？」

「まあね。」

「けど、ハイナ教国なら飛び越えなくてもいけるかもしれませんがよ？」

「何か方法があるの？ 門番を倒すとかは無しだよ。」

「しませんよ、そんなこと。」

顔が真っ青になっても冷静につつこむアリアは凄いと思いました。

「オルアナ王国みたいに砦があるんで、検問所から直接行きます。」

「やっぱ倒す作戦じゃん！」

「違います！ 検問所のところで人さらに攫われたけどなんとか逃げてきましたって言うんですよ。」

『そんなのでいけるの？』

「いけます！」

「どうしてそんなに自身満々？」

「ハイナ教国の国民はエルフの人の言うことは結構信じるので。」

人の良心を利用する気がアリアよ……

「そういえばだけど、アリア？」

「何ですか？」

「魔法がどうして衰退したのか聞いてなかったよね？」

「ああ、商人に邪魔された話ですね。」

『何の話？』

「うゝん使い魔の黒猫さんには関係ない話かな。」

「まあ、使い魔さんは人間とは違いますからね。」

『けど、気になる。』

「まあ、話しますね。」

シムルグの上でアリアの講義が始まりました。

「100年前に戦争があったのは知ってますよね。」

「まあ、一応は。」

『知ってる。そんなに生きてないけど。』

「じゃあ、レイさんに質問です。戦争で一番危険視される職業は知っていますか？」

「ん？そりゃあ魔法使いとかの遠距離から強力な攻撃が出来る職業でしょ？」

「その通りです。」

「マジック・テイル」には国同士の戦争というイベントもあったので分かる。空から大量の隕石が降ってきたりするのにはびびる。

「それ以外にも死んだ人を生き返らせる魔法とかも昔はありました。」

『蘇られたら厄介。』

「大体そういう危険視されるのは魔法が殆どでしたので戦争の時に真っ先に狙われたのはこの国でも魔法が使える職業でした。」

「ふむふむ。」

「だから戦争の最初の頃から魔法を使える人は一気に減ったらしいです。さらに国にある魔導書なんかも焼き払われてしまったらしいです。」

「なるほど、それで魔法を教えられる人がいなくなっちゃったのか。」

「はい、だから今は魔法をまた1から研究している所なんです。」

「マジック・テイル」ではレベルが上がれば魔法を覚えたがそこから辺は違っただろう。

「ハイナ教国はその魔法の研究が一番進んでいる国なんですよ。」  
「へえー。」

アリアが自慢げにしている。自分の国を誇りに思っているのだろっ。

「あ、国境が見えてきましたよ。」

『茨の壁がある。』

「オルアナ王国のとは全然違うね。」

ハイナ教国は国境が茨で囲まれているようだ。触ったら痛そうだ。

「確かこれも魔法で作ったらしいですよ。」

「魔法は便利だね。ハイナ教国は羨ましいよ。」

「シムルグに乗りながら言うセリフじゃありませんね。」

確かに、移動にはとっても便利だね！

「さて、アリアが慣れてきたところ悪いけど降りましようか。」  
「確かに慣れましたけど……早く降りてくださいよ……。」

シムルグから降り徒歩で移動する。

『やっぱ地上が一番。』

「そうです。その通りです黒猫さん。」

なんか奇妙な連帯感を持っている二人をほほえましく見ながら進む。

「そういえばさっき居たのはオルアナ王国で今向かっているのはハイナ教国よね？」

「はい、そうですよ。」

「それ以外に国っていくつあるの？」

「マジック・テイル」では4つあったけど今はどうなっているのだろうか。

「国は3つですね。それと国ではないですが、ライヴァン同盟っていうドワーフの集まった集落が1つあります。」

「国じゃないの？」

「国ではないのですがほぼ国みたいな物です。オルアナ王国は一番種族に関することは平等な所ですね。国王はヒューマンですが貴族は頑張ればどの種族でもなれますよ。」

「アリアは物知りだね。」

「一般常識です。」

「じゃあ、ハイナ教国はエルフが中心の国なんだよね。」

「つというか、国民の殆どがエルフの国ですね。言ったとおり魔法の研究をしている国です。あとハイナ教の信者の集まりです。」

「国のトップはハイナ2世で、女王様です。後唯一のハイエルフラしいですよ。」

「へえ、ハイエルフ……」

「つという事はエルフマスターなのかな？ そこら辺は「マジック・

「テイル」と違うのかな？

「残りの1つの国はヴァルズ帝国ですね。ヒューマンが中心の国で、エルフや獣人つといった人を奴隷として攫ったりしているそうです。」

アリアが苦い顔をしながら話す。

「攫う？　じゃあ、あの人さらいって。」

「……多分ヴェルズ帝国に売ろうとしていたんじゃないかもしれませんか？」  
「奴隷って他の国じゃあ認められていないの？」

「ヴェルズ帝国以外では認められていませんよ。」

『あそこ、嫌い。ヒューマンが偉そうにしてる。』

黒猫さんが露骨に嫌そうな声を上げる……猫だから顔はよく分からないけど。

「後、ライヴアン同盟はドワーフ中心の集まりで、殆どの人は鍛冶職人です。他の国と装備を貿易する事で利益を得ています。」

「どんな装備があるんだろう。一回行ってみたいな。」

「多分レイさんの持っている装備に勝るのは一つもないと思いますよ。」

「100年前の戦争の影響？」

「ええ、魔法以外にも色々失われたそうです。」

「よくここまで復興できたね。」

『人間の意地は怖い。』

「意地って……。」

黒猫さんも居ると三人で会話が弾む。それにこの世界の事も大体分かった。

「やつぱ、女が三人居れば……なんだっけ？」  
「姦しいですか？　しかも使い方違うと思いますよ。」

視点変更　レイ　レオーナ

オルアナ王国首都アルノ　ここは国王の住む城を中心に内側から貴族、平民、貧民の順で円形になっている都だ。　ここに私は緊急で来た。　用件は二つ。　一つはペガサスが砦を越えて侵入してきたという事。　侵入したのは見たという報告があるが、何処に行ったのか不明。　今も搜索中だ。　もう一つはシムルグがループの町に現れたという事。　これはいきなり町に現れたことから何者かによつて召喚されたとされているが。　どうやって捕獲または契約したのかは不明という事もあつて、騎士の間じゃあヴェルズ帝国のスパイじゃないかという説もありこちらも調査中である。　正直こんな大事が二つもあり、これを王様に報告しなければならないというのは色々と気が引ける。

「失礼します。」

「ほう、レオーナか。　どうした？　アルネの森の調査は終わったのか？」

「いえ……それが至急報告しなければならない事が……。」

「何？」

「それが……」

とりあえず現国王に用件を伝えると王がなにやら悩んでいる顔をしている。　まあ、いまじゃ伝説のモンスターが二体も発見されたというのだから当たり前だが。



「王……?」

「いますぐ、捕まえろ!」

「はっ?」

捕まえる?　せめて討伐とかでは?

「そのようなモンスターを使えるようになればヴェルズ帝国との戦いにも使えるぞ!」

「で、ですが。我々だけでは……」

「つべこべ言わず捕まえよ!」

「は、はい。」

オルアナ王国の現国王は四代目である。今の国王はハツキリ言う自分勝手である。自分の欲しい物は意地でも手に入れようとしてしまう。前のヴェルズ帝国との対談でもその性格のせいで関係が悪化してしまった。この国王の事だから捕獲しないと気が済まないのだろう。正直言っただけかなり困ったことになったぞ……。

## 第8話 いざ！ハイナ教国へ！

視点変更 レオーナ レイ

やっと、ハイナ教国の国境の前に着き、茨の砦を見上げる。

「……今更だけどこの茨大きすぎない？」

「一応季節によってはバラの花を咲かせるようですよ。」

『見て見たい。』

「私も見たことないですね。」

二人と一匹で話しながら砦に沿って歩いていると検問所に辿り着いた。検問所にはエルフの男が二人居た。二人の格好は真つ赤なローブを着ている。初めて見る装備で少し興味がある。二人のエルフは俺たちの姿に気づいたらしくこっちに話しかけてきた。

「おや、どうかしました？」

「あ、あのですね。」

とりあえず二人にはアリアが攫われた事、私が助けたことを伝えた。

「それは大変でしたね。少し持ち物検査をしたら入っていいですよ。」

「え、もつと何か確認しないの？」

「ええ、ハイナ教を信ずる者を疑うなです。エルフは皆ハイナ教を信じていますから。」

「そうですか。」

エルフは良くも悪くも人を信じる種族であるようだ。 もう一人

のエルフが黒猫さんに目を向けて俺に聞いてきた。

「ところでこちらの猫は……？」

『レイの使い魔です。』

「喋れるのか！？」

「ええ、使い魔ですから。」

「使い魔でも喋れない者は居ますよ。」

「ま、まあ使い魔なら大丈夫か……済まないがこちらの部屋で持ち物や装備を点検させてもらうよ。」

「はい。」

真つ赤なローブのエルフに連れられて歩く。

「ねえ、アリア。」

「何ですか？」

「この人達って軍か何かなの？」

「ああ、この人達は魔導隊です。      オルアナ王国という騎士みたいな人達です。」

「あのローブ欲しいなあ……。」

「そこですか……でもあのローブ、鎧みたいに防御力があるらしいですね。」

「ランクは？」

「確かDですよ。」

「Dかぁ……じゃあいいや。」

「結構現実的ですね、レイさん。」

「私も色々あつたんだよ……。」

運営が悪ふざけで出現した東京ドーム位の大きさのモンスター「魔法城ジャイアントスパイダー」を捕獲しようとしたり、国同士の戦争で俺ばかりが狙われたり……見た目重視じゃあどうしようも

ないと思い知らされた……聖女のワンピースがなければもっとゴツイ装備になっていただろう。

「……とりあえず、ここで待っていてください。担当の隊員を呼びますので。」

部屋で待つようにいった魔導隊の人の顔がやや引きつっている。どうやらさっきの会話を聞いていたようだが無視する。しばらくすると同じ真つ赤なローブを着た女性がやってくる。

「お待たせ、じゃあ準備するからちよつと待つてね。」

「何をするんですか？」

「ん？【補助 サーチ】であなたの装備とかを調べさせてもらうよ、個人情報とか軽く無視しちゃうけどそこら辺は勘弁してね。」

「私は、それでいいですけど。」

「うん……まあいいかな？」

「？レイさん何か問題あるんですか？」

「い、いや何もないよ？」

……今、ハイエルフでエルフマスターでレベル500だよな？  
今の世界の状況からして俺はイレギュラーな筈。どうにかして隠したいがどうすることも出来ない。

「よし、準備完了。じゃあやるよ？ 大丈夫？」

「はい。」

「う、うーんまあ。」

「じゃあ、【補助 サーチ】。」

魔導隊の人がアリアを凝視して、しばらくしたら紙に何か記している。多分名前とかを書いているのだろう。

「じゃあ、次は……っえ!？」  
「どうかしました?」

魔導隊の人が俺を見て固まる。

「……ハイエルフでエルフマスターってあなた何者ですか!？」  
「あ、やっぱり珍しいんだ。」  
「珍しいってもんじゃないですよ! ハイエルフなんてもう、女王様しかないと言われていたのに。」  
「レイさんハイエルフだったんですか。 てつきりホーリエルフくらいかと思っていましたが。」  
「そうだよ。 褒め称えてもいいんだぞ。」  
「実際に褒め称えられてもおかしくないですよ。」  
「そ、それは困るね。」

俺は自由に生きるんだ!

「あ、このことは報告書に書いても良いけど色々な人に言いふらしたらダメだよ。」  
「は、はい!」

検査を終え、すぐにハイナ教国内に入れた。 なにやら魔導隊の人達が敬礼をしていた。

「何で、みんな敬礼していたんだろう?」  
「ハイエルフはハイナ教では神に近い存在ですからね。 女王様くらいしかハイエルフはいないですよ。」  
「ほ。」  
「理解してます?」

「流石に分かるよ。」

ハイナ教国は国境に沿って森があるとアリアが言っていたが、中々大きい森だ。アリア曰く侵入者とかを精霊に教えてもらうためらしい。

「そういえばアリア？」

「何ですか？」

「あなたの故郷って何処？ 首都に行くついでに送りたいのだけでも。」

「私の居た村ですか？」

『それ以外に何があると？』

「……私としてはもつとレイさんと一緒に旅をしたいんですけど。」

「何で？ お父さんやお母さんには会いたくないの？」

「会いたくないって訳じゃあないんですけど……村から外にでたのは初めてで、レイさんと出会えたんだったら人さらに攫われたのもよかったかもって思ってしまう私もいるんです。」

「うーん、確かアリアの家って教会なんだよね。」

「はい、ハイナ教国は貴族が居ない代わりに聖職者が高い地位に就いていますからね。よく言えばお嬢様、悪く言えば箱入り娘っていう感じですかね。まあ、村には友達もいますし、商人の人とも喋ったりはしますけどね。」

「でも、色々と知っていたよね。」

「それは全て本からですよ。初めて見る物ばかりでしたから。」

アリアがやや自嘲気味に笑う。

「つまり、アリアは家族を心配させたくはないが。もつと外を見たいって訳だね。」

「……はい、そうです。」

「なら、簡単だよ！」

「……何かいいアイディアが？」

「アリアのお父さんとお母さんに自分の気持ちをハッキリ言って。私と居てもアリアが安全だという事を証明すればいいんだよ！」

「……レイさんは私と居ても迷惑じゃないんですか？」

「迷惑なわけではないじゃん！むしろ私がアリアに助けられてばかりじゃない！」

「レイさん……ありがとうございます……。」

アリアが半分泣きながら答える。親の問題か、俺も昔はスカートを履かせようとしてくる母や姉に怒って、三日間家出したこともあったもんだ。アリア位の歳（俺もだな）の時には大体悩む物だというからな。アリアの友達として出来る事をしてあげたいと俺は思った。

「大丈夫！あなたの事を言えばきっと分かってくれるって！」

「はい……そうですね……。」

「じゃあ、善は急げだね！すみませーんその商人さーん！」

「ん？何だ？嬢ちゃん達？」

私は、後ろからきた商人の馬車に話しかける。

「護衛ついでに私達を乗せてください！」

「い、いきなり唐突だね……。」

『使い魔付きだよ。』

「うお！猫が喋った。」

「お、お願いします！」

「私をタダで雇えるんだから乗せなさい！」

「何故そこで命令口調なんだお嬢ちゃん！まあ、いいけど。どこまで行くんだい。」

「何処？ アリア？」

「え、えっとシイラ村まで。」

「シイラ村？ ああ、ちょうど休憩地点にしようと思っていたんだ。いいぜ。」

「ありがとうございます。」

『感謝する。』

商人は了承してくれたので荷馬車に乗り込む。今回乗った荷馬車はアリアを攫った人さらいの物とは違い窓が二つ有り、中には木箱がいくつか置かれている。窓にはガラスがはめられている。

「おー！ 意外と広い！」

「お嬢ちゃん……いきなりで結構失礼だね？」

「そんな事は気にせずに行こう！」

「一応気にしなくちゃいけないと思いますけど……。」

『早く行きたい。』

「……まあ、いいやお嬢ちゃん。しっかり護衛をしてくれよ。」

「もちろん！」

さあ！アリアの故郷へ！



## 第9話 キモイのは苦手です……。

「うゝん、馬車も中々いいねえ。」

シムルグで空を飛んで移動するのもよかったがゆっくり地上を歩くのも中々いい。今は森を抜け草原を馬車はゆっくりと歩いている。

「やっぱりシムルグよりはこっちの方が私はいいですね。」

「地面に足が着いている方がいいの？」

「まあ、そういうことですかね。」

「スレイプニルとかは良いの？」

「……多分無理です。」

とりあえず俺は【補助 探知】で自分の半径500mを見張る。中にモンスター等の反応があれば感覚で分かるようになってい

「商人さん、今のところ周りにモンスターはいませんよ。」

「ん？お嬢ちゃん何か魔法でも使えるのかい？」

「まあ、使えますよ。」

「へえ、それなら護衛してもらって正解かもしれないな。」

「そうでしょう、そうでしょう。」

俺は胸を張って答える。こうした後には自分の胸の大きさを自覚して、軽くうなだれる。そういえば女だったと……。

「そういえば、商人さん。後どのくらいでシイラ村に着きます？」

「うゝん、大体二、三日かかるかな？」

「二、三日かあ。」

中々時間がかかるな。　　やっぱスレイプニルを使った方が早いかな？

「とりあえずレイさん。　変なモンスターは召喚しないでください  
ね。」

「変なモンスターは召喚しないよ！　かつこいいモンスターを出す  
だけだよ！」

「そこが問題です！」

いつものやりとりをしながら馬車に揺られながら進むのであった。

「そういえば、何を運んでいるの？」

「ああ、ライヴァン同盟から買った、武器をハイナ教国の魔導隊や  
冒険者に売るんだ。　剣はエルフ達にはそんなに売れないが、エル  
フ以外の冒険者も首都にはいるからな。」

「へえ。」

エルフは他の種族に比べて物理攻撃力と物理防御力が少ない。  
その分魔法攻撃力と魔法防御力は他の種族に比べて高い方だ。　そ  
のせいか「マジック・テイル」の頃から剣士になるエルフは俺くら  
いしか見たことがない。　そういえばオルアナ王国の騎士団長は剣  
士だったな、風変わりなイケメンもいたものだ。

「レイさんって武器色々持ってますよね？」

「ん？　まあ持つてるよ？　いきなりどうしたの？」

「いや……前は弓を使ってその後は杖……他にどんなのを使うのか  
な？　とふと思っただけです。」

「うーん、他には……剣も使うしナイフも使えるし、銃も撃つし、

鞭もあるし、槍だって使えるし……大体の武器は使えるんじゃないかな？」

「ただ武器あるんですか……。」

まあ、エルフマスターは伊達じゃないね。

「ん？商人さん。前方にモンスターが五匹くらいです。」

「なんだ？魔法に引っかけたのか？」

「そんな感じです。」

まだどんなモンスターか分からないが、破邪の弓をアイテムボックスから取り出す。

「どうするんだい？お嬢ちゃん。」

「そのまま前進してください。こっちに来る前に全員倒します。」

「

「レイさん出来るんですか？」

「もちろん！」

「本当に出来るのかい？」

「レイさんが出来るって言ったので出来るんじゃないですか？」

モンスターとの距離が約200mくらいになったところで【補助ホークアイ】を使う。

「うわっスライムじゃん。」

「強いんですか？」

「いや、キモイ。」

「そ、そうですか。」

「スライムをキモイで片付けられるのか……。」と商人が呟いて

いるが無視する。スライムはレベル5からレベル40くらいのモンスターもいる序盤によく見るモンスターだ。だがドクエのようなかわいい姿はしておらずにかくキモイ。表面がやけにテカテカしてる。「マジック・テイル」の時もきもかったが現実に見るとかなりキモイ。

あまり見たくないのですさつさと済ませようと。矢筒から矢を取り出し、弦を引く。

「【奥義 レインアロー】」

「奥義使うほど見たくないんですか!？」

「だってキモイじゃん？」

矢を上空に飛ばす、その後矢が何百本にもなってスライムに襲いかかる。まあ、一発当たればスライムくらいなら倒せたんだけどね。でも、キモイじゃん？

「お嬢ちゃんすごいね……。」

「キモイのを倒すにはこれくらい必要です。」

「そんなに嫌ですか。」

「もちろん!」

「……まあお嬢ちゃんが護衛してくれて本当に助かったな。」

「スライムってそんなに危険何ですか？」

「まあな、全然ダメージが効かないからあまり好んでする人はいないな。」

「ふーん。」

ちなみにスライムを倒したところを通ったらスライムはなんか緑色の液体になっていました。

二日後、俺はまだ馬車に乗っていた……当たり前か。ちなみに夜は黒猫さんが見張っていたおかげで俺の貞操の危機は特になかった。まあそんな事しそうな人ではなかったし。

「そろそろ着きますよね？」

「ああ、シイラ村にはそろそろだな。」

「そろそろですか……。」

アリアが緊張した顔をしている。

「ようやく風呂には入れるよ！」

「そこですか！？」

「大丈夫だつて！ あなたの両親は分かってくれるって！」

『そうそう。』

「もしもの時は実力行使さ！」

「レイさんが言うときく村が吹き飛びそうですね……。」

「……なんか分かんが家出でもしてたのか？ とりあえず村の入り口が見えてきたぞ。」

見えるのはまだ小さくしかみえないが木の柵で覆われている村が見えている。

「さあ！アリアを巡る戦争だ！」

「何ですかそれ！？」

『おー。』

「黒猫さんもやる気満々！？』

俺はアリアの友達だ。アリアがしたいようにするのを手伝うのは当たり前だ。

「……良い友情じゃねえか。」

「ん？何が？」

「なんか知らんがそこのお嬢ちゃんの為に頑張るんだろ？」

『その通り。』

「いいねえ、青春だねえ。」

ゆっくりとシイラの村が大きく見えてくる。【補助 ホークアイ】で見ると絹のような服を着ている大人が二人、門の入り口に建っている。二人ともエルフだ。

「あれ？魔導隊じゃないんだ？」

「ん？ああ、魔導隊は国境付近や首都にしかないんですよ。数が少ないですから。多分村の大人の人ですよ。」

『っていうかどうやってあそこから人を攫ったんだろ？』

「……確かに。」

「ああ、ヴェルズ帝国の人さらいには変わった魔法を使える奴らがいるらしい。何でも一時的に意識をなくすんだとか。」

「商人さん詳しいですね。」

「こうやって物を運んでいれば色々と情報が聞けるのさ。」

『ふーん。』

正直黒猫さんにはそんなに興味がないようだ。ゆっくりと近づくと、エルフの人が近づいてきた。大人といっても見た目は20歳くらいにしか見えない。これは「マジック・テイル」の公式設定でも書かれていたが20歳まではヒューマンと同じように普通に歳を取るがそれ以降はかなりゆっくり成長し寿命は200歳くらいあるそうだ。

「よっウイナ。首都に行く途中か？」

「ん？まあな。　後お客様もいてな。」

あ、商人さんの名前はウイナって言うんだ。　初めて知った。

「お客様？　その隣にいる二人の少女……ってアリアじゃないか！」

「どうも。お久しぶりです。」

「戦争をしにきました。」

「は？」

「レイさん、言うことがおかしいです。」

とりあえず村人に事情を説明した。

「うーん、アイウス神父が納得してくれるかね。」

「……やっぱり厳しいですね。」

「ああ、あいつは娘に甘い危険なことはさせたくないって奴だからな。」

「ああ、頑固親父か。」

「まあ、そんなもんだ元々旅をさせるってなれば大抵の親は反対するさ。」

「……やっぱり実力行使しかないかな。」

「とりあえず父さんに会って説得ですかね。」

「まあ、がんばりなお嬢ちゃん達。」

「ええ、お世話になりました。」

商人さんと柵のところで別れる。

「そうだ！ウイナ。」

「何だ？」

「今、ヒューマンの個人ギルドの人達が泊まってる。　もしかしたら売れるかもしれねえぞ。」

「ホントか？　ありがとう！」

個人ギルドとは依頼などを受けることが出来る冒険者ギルドとは違い。　個人で集まって冒険者ギルドの依頼などを受ける人達の集まりだ。　「マジック・テイル」でも個人ギルドを作り、みんなで国同士の戦争に参加したり。　城や家などを拠点にし、みんなで集まったりすることも出来る。　時には拠点を襲撃されることがあるため防衛したり……といった事が出来る。

「なんて名前のギルドですか？」

「ああ、狼の集いだったかな？　オルアナ王国ではそこそ有名らしいな。」

「へえ……あれ？　どうしてオルアナ王国の冒険者がハイナ教国に居るの？」

「一応冒険者ギルドはオルアナ王国とハイナ教国のは一緒のギルドなんですよ。」

「国は違うのに？」

「ええ、何でも国の政策には従わないで民の為に働くとか。」

「いい心がけだね。」

「そろそろ行きましようかレイさん。」

「そうだね。」

「頑張ってアイウス神父の頭を柔らかくしてくれよ。」

「頑張ってみまゝす。」

村の方へ二人と一匹で歩く。　さあ、戦争だ！……流石に実力行使はさけたいけどね。

追記　そういえばアリアの父親アイウスって言うんだ。　初めて知ったよ。





## 第10話 シイラ村での出来事

村の建物は殆どが木製で出来ている。……うん、村だ何も無い普通の村だ。村の人は皆アリアを見かけるとみんなやってきた。

「あれ？アリアちゃんじゃないか！ 何処に行ってたんだい！ みんな探したんだよ！」

「……すみません迷惑を掛けました。」

「いや！無事ならいいんだよ。」

「あ！アリア！何処に居たの！？」

「ルイス！ごめん心配掛けちゃって。」

「……ううん。村じゃあ人さらに攫われたんじゃないかって言われたから。大丈夫だったんだね。」

「うん、レイさんに助けられたから。」

「へえ、ありがとうございます！あなたのおかげで私の親友を助けてくれて。」

「ふっふっくん、どうしまして。あなたはアリアの友達？」

「は、はい！ルイスです。」

「アリア、いい友達いるじゃない。」

「ま、まあいますよ。」

アリアは慕われているんだなあと俺はこの光景を見て思う。

それでもアリアは外に出たいと思った。まあこんなに小さな村に14年もいれば外に出たいと思うのも当然か。

「あ、私の家はそこです。」

「おお、本当に教会なんだね。」

「そりゃあ、神父の娘ですから。」

村の中に一つだけレンガ造りの教会が建っている。これだけ雰囲気が他の建物と違う。中々高級そうだ。

「ハイナ教の教会は国が建てるんですよ。」

「そこにアリアは住んでいるの？」

「はい、そうです。」

「じゃあ、あそこが戦場か！」

「だから実力行使は最後ですよ。」

「最後ならいんだ！」

なんだかんだと会話しながら教会の扉に辿り着く。

「中でお祈りとかしてる可能性はないの？」

「お祈りをするときは見張りの人以外はみんな教会にお祈りに行きますから。大丈夫ですよ。」

「ふーん。」

本当に熱心な信者が多いんだなあ日本とは大違いだと関心しているとアリアが扉をノックしてから開ける。

「お父さん？ 居ますか？」

「アリア！無事だったの！？」

アリアが教会に入ると黒髪が腰に着くくらいの長さでややウエーブがかかっている。胸は結構大きいな……アリアの将来が期待できる。アリアはとりあえず今までのいきさつを伝えているようだ。

「とりあえず帰ってきてくれてよかったわ……もう何処にも行かないわよね？」

「え、えーっと。」

「ふっふん。　アリアは私と冒険をするのだ。」  
「は？」

「……レイさんもつと分かりやすく説明を。」

「そこら辺はアリアが説明してよ。」

「なら口を挟まないでください。」

「……すみません。」

『これはレイが悪い。』

黒猫さんにも言われてしまった……。　がつくりと俺はうなだれる。

「旅に出る！？　そんなのダメよ！」

「一人ではないから大丈夫だってばお母さん。」

「ダメよ！　あなたは大事な娘なのよ。」

「ですがずっとこの小さな村に閉じ込めておくつもりですか！」

『小さな村言っちゃうんだ。』

「変なところで関心してないの。　大丈夫ですよ私がいますから。」

「だから心配なの！　たかが人さらいから娘を助けたくらいであなたみたいな小娘一人で信頼できると思っっているのですか！？」

「ちよ、ちよっとお母さんその人は……。」

「信頼できるか証拠が欲しいという事ですネ？」

『……レイ？』

「レイ……さん？」

「そ、そうね信頼に値すれば考えてあげてもいいわよ？」

「じゃあ明日朝に誰か相手を用意してください。　決闘で決めましょう。」

「そうね……いいわ。　夜にお父さんと相談するから。　アリアは今日は教会に泊まりなさいね。」

「……はい。　すみませんレイさん。」

「分かったわアリア。」

いったん別れて黒猫さんと教会を出る。そして宿を一人と一匹で探すことにした。

「そういえば【補助 変身】って使えるのよね？」

『ん？ まあ出来るよ。』

「やってみてくれない？」

『……まあ、いいけど。』

そういつと黒猫さんの体が白く光り出す。あまりのまぶしさに俺は目をつむってしまった。しまった！変身シーンとかあったんじゃないのか！？

「何で目を閉じているの？」

「ん？うわあ！かわいい！」

目を開けたらそこには黒いコートを着たヒューマンの女の子がいた。髪はどちらかというと白に近い色の灰色。身長はアリアよりも小さい位。胸はぺったんこだ。

「……失礼な事考えてない？」

「い、いいえ何も？」

「考えていたでしょ。」

「……と、とりあえず宿を探そう！」

「……逃げた。」

黒猫さんが猫の体に戻る。理由を聞いたら『宿代が一人分で済むでしょ？』とのこと。中々考えているようだ。村人に聞きながら宿屋を見つける。二階建ての木造の家だ。俺は中に宿屋の中に入る。中にはエルフの女性が一人……多分この宿の女将なの

だろう。

「中々かわいいお嬢ちゃん……黒猫？冒険者かい？」

「はい、こっちは私の使い魔です。」

「へえー、使い魔かい。」

『その通り。』

「おっ喋るのかい。　なかなか面白いねえお嬢ちゃん達は。」

「ところで泊まるときは。」

「ああ、一人分でいいよ。」

「ありがとうございます。」

「あつ、でも今は狼の集いつていうギルドが来ているから一応気を付けておいてくれよ。」

「何で？」

「正直言つて。　偉そうにしている困ってるんだよ。　まあ刺激しないようにして事だ。」

「はい、分かりました。」

お金を払い中に入る。　一階は食堂になっていて二階が客室らしい。　女将に誘われて二階に行く。

「ん？女将さん？何だそのお嬢ちゃんは。」

二階の廊下でいきなりヒューマンの男達にからまれました。

「ああ、お客さんだよ。」

「客？ということは村人じゃあねえんだな。」

「ああ、冒険者らしいよ。」

「冒険者？んな馬鹿な！？」

男達がいきなり笑いまくる。

正直いますぐ全員を「魔法　エク

スプロード」で炭にしたいが耐えて、質問する。

「何がおかしいんですか？」

「だってお嬢ちゃん一人だろ？ 一体何で戦うんだよ？ 魔法か？

一人で使う魔法なんてたかがしれてるぜ。」

「そうそう、お嬢ちゃんみたいな世間知らずが冒険者名乗ったら俺たちの名が落ちちまうぜ。」

そうだそうだと言いながら男達が去る。 苦い顔をした女将が俺に話しかける。

「すまないね、気分を悪くしたかい？」

「いいえ、大丈夫です。」

女将に部屋を案内されてからはすぐ風呂に入り、明日の作戦を黒猫さんと考えていたが途中から黒猫さんの着せ替えショーになっていたのは気にしない事にしよう。

視点変更 レイ アリア

「……で、アリアお前の気持ちは変わらないんだな。」

「はい、私は自分の目で外の世界をみたいと思います。」

夜、教会でお父さんとお母さんと一緒に夕食を食べる。 正直、この二人よりもレイさんと居る方が何かと気が楽に思えてしまう。 たった四日間しか一緒にいないのにおかしな事だ。 まあ、なんか私が勝手に特別視しているのだが。

「どうか言ってよ！あなた！」

「……まあ、お前の言うレイという子が決闘を申し込んできたのだ

ろう？ 俺たちが用意した対戦相手と闘えばアリアの事は諦めるのだから強い相手を用意すればいいじゃないか。」

「誰を相手に出すつもりですか？お父さん。」

「今、狼の集いというギルドの者達が泊まっているだろう？ そこにギルドマスターがいてな。」

「まさか！？」

「そのまさかだよアリア。ギルドマスターが直接闘ってくれるように頼んだ。あのような20歳にも満たない少女にギルドマスターと闘わせれば流石に諦めてくれるだろう。」

「大丈夫かな……。」

「流石に少女相手だ手加減はしてくれるだろう。」

「いや、そのギルドマスターの人が。」

「はっ？」

「いえ、何でもありません。」

「まあ、レイという娘が負ければこの村に残ってくれるのですよね？」

「ええちゃんと言いましたよ。そこは守ります。」

その後、一人で風呂に入り。レイさんに少しの不安を思いつつもベットで寝た。

なんだかんだ言っただけでレイさんが勝つとしか私には思えなかった。



## 第11話 いざ！決闘！（前書き）

まじめな戦闘描写は初めてですね。  
うーん、いまいちな出来……。

## 第11話 いざ！決闘！

視点変更 アリア レイ

光の眩しさに目を開ける。　そういえばずっと馬車の上で寝てたからベットで寝るのは久しぶりだな。　そういえば前に宿屋に泊まった時は隣にアリアが寝ていたんだっけ。　あれは驚いたなーって昔を思い出しつつも隣を見ると黒猫さんが人型で何故か寝ていた。　……ん？昨日の夜は何があったんだっけ？　確か夜どんな武器で闘おうかという話で盛り上がって。　途中から黒猫さんの服を替えられないかと俺が考えて黒猫さんの着せ替えショーになって……あ、ここからおかしくなってるな。　とりあえず黒猫さんを起こそうと体を揺すって起こす。

「ん……？」

「起きろー朝だぞー。」

少し揺すつたらすぐに目を覚ました。　そして目をこすりながら起きる。　中々かわいいな……と考えていたが体を起こしたことで彼女にかかっていたシャツが落ちたときに恐ろしい事に気がついた。　服を着ていない……だと！　こんなことは体育の授業の時に体操着に着替える時に男子生徒から鼻血を出されたときくらいの衝撃だ！　アリアの肌は真っ白でずっと光一つ届かない部屋に居たかのように真っ白で下は……説明はしないぞ……うん。

「んー後5分。」

「そんなこと言ってないで！　服を着て！」

襲いたくなっちゃうじゃないか。

「分かった……。」

黒猫さんがモゾモゾとベットから出ると。最初に着ていた黒いコートを着始める。

ちなみに女将曰く「決闘は昼、村の中心の広場でするって言ってたよ。」と言っていた。何故場所が分かったんだろって聞いたら。ここしか宿屋がないからじゃない？とのこと。そういえば時間とか決めてなかったな……。

「レイは着替えないの？」

「え？ああ。そうだね、まだパジャマだね。」

ネタ装備のパジャマに着替えて寝てたため、服を着替える。着る服は今回も変わらず聖女のワンピースを着る。

「よし！朝食に行こう！」

『うん。』

「あれ？黒猫さんになっちゃうの？」

『一人分で部屋は取ったんだよ？』

「あ、そっか。」

『それに食費も浮くよ？』

「いや、そんなにお金では困ってないから。」

黒猫さん中々節約家だな。一階に降りて食堂にやってきた。食堂は丸い机と椅子がいくつかある感じのレトロなRPGでありそんな感じの食堂だ。そこには女将が料理をしていたが俺に気付き挨拶をする。

「おはよう！よく眠れたかい？」

「はい！とっても眠れました。」

『同意。』

「そうかい、それはよかった。……そういえば聞いたかい？」

『何を？』

「決闘の話は私も聞いてるんだけど。相手は狼の集いのギルドマ

スターらしいんだよ。」

「へえ。その人は強いんですか？」

「ああ、大剣士のヒューマンだよ。ここに泊まっているから顔も知ってる。」

「大剣士……。」

大剣士は剣士の上位職に当たる職業だ素早さと回避能力が低い代わりに物理攻撃力と物理防御力かなり高い。この職業は一撃が強いが隙も多いかなり扱いづらい職業で、剣士の上位職で別の魔法剣士と双剣士に転職する人が多かった覚えがある。

「まあ、相手が何であれ闘うんだろ？」

「はい！もちろんです！」

「アリアの為なんだろ？ がんばりなよ！」

「あれ？アリアを連れて行くなとかじゃないんですか？」

「まあ、旅に出たら心配だけど。アリアは生まれてからずっとこの村に暮してんだ。父親や母親が首都に行くときもな。少し外を見させた方がいいのさアリアには。」

『アリアと知り合いなの？』

「まあ、村の人は皆家族みたいな者さ。」

「いい村ですね。」

「まあね。さあ決闘のために朝食を食べな！ 何か食べなくちゃ力が出ないよ！」

「はあ。いい。」

『キャットフードは？』

「ないからご主人様から分けてもらいな。」  
『……はい。』

ちなみに料理は卵焼きとパンらしき物とキャベツのサラダという普通の朝食でした。

「そういえば狼の集いの人達は？」

「朝、外に出たのが何人かいたな。それ以外は皆寝てるんじゃないかな。」

「ふうん。」

「あんたはこれからどうするんだい？」

「とりあえず部屋で武器を準備しておきます。」

「へえ。なかなか面白そうじゃないか。」

「瞬殺するからみててくださいよ！」

「そ、そうかい。」

あ、苦笑いしてる。その後黒猫さんと一緒に部屋に戻った。

「黒猫さんは闘うの？」

『あなたはと思う？』

「私としては一人で徹底的にフルボッコがいいんだけど……。」

『じゃあ、それでいいじゃない。』

「それもそうだね！ 後衛職でボッコボコにされるギルドマスターとか見物だよね！」

『意外と恐ろしい事考えているね。』

昨日罵倒してきた狼の集いの奴らの驚く顔が目には浮かぶぜ！

まあ、武器とかを黒猫さんと決めていたらいつのまにか昼になっていたので手に黒いケースを持って女将付き添われ、広場に向かう。ケースの中には自分の武器を入れてある。流石に大勢の前でアイテムボックスを出すわけにはいかないしね。広場には大量の人で溢れていた。こんなに人がいたのかこの村には。

「うわあ、ギャラリーがいっぱいだね。」

「まあ、何にもない村だからね。こんなイベントがあれば皆見に来るさ。」

『暇なんだね。』

「まあ、そうだね。」

何人かの人が気づいてこっちに声を掛けてくる。

「がんばりなお嬢ちゃん！」

「あの頑固親父の頭を柔らかくしてくれよ！」

「ギルドマスターにやられちまえ！」

「つーかあんな小娘の為にギルドマスターが出るのかよ。」

……なんか色々と言われているが全てスルーを決め込むことにして広場の中央に進む。広場の中央には身長180を軽く越えてそうな大男が立っていた。髪は黒く肌は茶色気味見た目30歳くらい……かな？そして手に持っているのはその身長よりも大きい大剣……見た目からして鉄製だと思う。広場の中央には流石に人は大男しかいないがギャラリーの中にはアリアとアリアの母親、そして神父のような格好をした男が居た。多分アリアの父親だろう。ギャラリーを見回していると大男が話しかけてきた。

「お主がレイか？」

「ええ、そうよ。」

「このような小娘相手に私が雇われるとは……なめているのか？アイウス。」

「なめてなどいません。その少女はこう見えても盗賊を一人で倒すくらいの実力はあります。」

「ほう。」

アリアの父親のアイウスと会話をしているギルドマスターらしき人に話しかける。

「あなた、名前くらい名乗ったら？」

「ルルダンだ狼の集いのギルドマスターをしている。」

「ルルダン……愉快そうな名前ね。」

「なめているのか？」

「いいえ。」

ルルダンが睨み付けてくる。      おお怖い怖い。

「武器は構えないのかな？」

「大丈夫ですよ。ここに用意してあるから。」

黒いケースを地面に置き中から武器を取り出す。      それを見て村人の一人が呟く。

「……ヴァイオリン？」

「ええ、そうですよ。ヴァイオリンです。」

「そんな武器で大丈夫なのか？ 手加減はせぬぞ。」

「大丈夫です。      あなたも死なないように踊りなさい。」

風がやむ。      俺はヴァイロンをあごに挟み構える。      ルルダンも

ゆつくり大剣を持ち上げる。何も知らない人が見たら何が起るのかサッパリ分からないだろう。

俺は素早く弓を使い音を出す。その瞬間ルルダンがこちらに走り出す。

「今だ！」

ルルダンが剣を振るうがその攻撃は見えない壁によって阻まれる。

「あの小娘！一体何を！」

「小娘の周りの白い球体は何だ！？」

「……まさかもう魔法を発動したのか！」

「早すぎる！一人で出来る魔法じゃねえ！」

ギルドの人達が戸惑う中アリアは「流石ですね……。」と感嘆しているのが聞こえるが今は闘いに集中する。

ヴァイオリンなどの楽器を使う職業がある。精霊術士といいエ

ルフ専用の職業なのだが不人気な職業ナンバー1といっても過言ではない。この職業はMPを使わないでも【魔法】を使え一人で攻撃、回復、ステータスUP等の様々な【魔法】が使える反面周りに武器を使って精霊を集めなければならないという弱点がある。しかも精霊を集めるのが恐ろしく大変なのだ。森の中なら精霊は結構早く集まるが、草原では森よりも遅くなり、砂漠や火山に行けばかなり精霊が集めにくくなる。つまり場所によっては全然役に立たない職業である。ちなみに精霊が集まると周りに白い球体が現れる。そして、ルルダンからの攻撃を守ったのは【魔法 精霊術の盾】である。上位職には火山などで精霊の代わりに悪霊を集める悪霊術士と光魔法が中心の聖霊術士がある。

「さあ、攻めますよ。【魔法 精霊の砲撃】」



「クソッ！」

【魔法 精霊の砲撃】は白い球体がビームを勝手に撃ってくるという支援魔法だ。 精霊術士でソロで戦うには必要不可欠の魔法だ。 ルルダンが白い球体からのビームに気を回さなければいけない。 っている。

「こっちからも攻撃はしますよ。 【魔法 精霊撃】」  
「なっ！？ぐふっ！」

ヴァイオリンから放たれた光の熱線によってルルダンが吹っ飛ばす…… やり過ぎたかな？ とは思ったが気絶しているだけだから大丈夫だろう。

ギャラリーが呆然としている。 そしてアリアがポツリと言葉をこぼした。

「これって、勝ちって事ですか？」  
「うーん、そうじゃないかな？ 多分。」

意外にも呆気なく決闘は終わってしまったのであった。

## 第12話 少し動いた世界とある男は物思う

「嘘だろ……ギルドマスターが……。」

「こんなにあっさり……。」

「ありえねえ……。」

狼の集いの人達が呆然としながら呟く。俺はその人達を見ながらスカツとしつつも。アリアの父親アイウスさんだったかな？に話しかける。

「約束は守ってくださいね？」

「ああ、約束は守ろう。アリア、聞いてくれ。」

「はい？」

「外は広いし危険だ。それは分かっているな？」

「はい。」

「世界には様々な危険がある。モンスターだけではない。人さらいのような悪い人も居る。それでもお前は見たいのか？」

「ええ、もちろん。」

「ならば見に行くが良い。世界は広い。その世界をよく見てこの村に帰ってこい。」

「お父さん……はい！」

アリアの父さんが名言っぽいことを言う。妻にさんざん言われる俺の父親とは段違いだぜ。

「意外といいお父さんだね。」

「レイさん……はい、意外といいお父さんでした！」  
「意外とって……。」

あ、アリアのお父さんはガツクリと頂垂れているのをアリアのお母さんや村人が励ましている。中々面白い光景だ。

「じゃあ、もう出発しましょうか。」

「ん？ もう行くの？」

「はい、ずっと居たらついついずっと居そうですから。」

『そんなものの？』

「私には分からないわ。」

「……意外と淡泊なんですね。二人とも。」

「まあ、色々あったからね。」

いきなり異世界に来てここまで冷静なんだから意外と淡泊なのかもしれないな。よく思ったら元居た世界はどうなっているのだろうか？ 「衝撃！オンラインゲームで死んだ！？」って感じにニユースになつてたらやだなあ……。

「レイさん？」

「あ、うくんじゃあ行こうか。」

『おー。』

「アリアちゃんと帰ってくるんだぞ。」

「はい！お父さん行ってきます！」

「ああ、行つてらっしゃい。」

親と子の感動の場面であるが、くぅーっと言つ小さな音が俺の腹から聞こえてきた。

「あ、昼食を食べてから行こう。」

「何かと台無しですね……。」

食事は大事だよ！

視点変更 レイ レオーナ

ハイナ教国で出来た魔法で瞬間移動の魔法が最近オルアナ王国に普及してきて比較的短時間で移動が可能になった。その分MPを大量に消費してしまつたため首都からループの町までに魔法使い6人分のMPが必要という弱点もあるが便利な魔法だ。

町に戻ってから騎士達によるモンスターの搜索が続いている。もう三日はたっているが何処にもいない。今ここ国境で待機している騎士達は皆疲れが出始めている。

「団長……やっぱり王を説得して搜索を打ち切った方が……。」

「だが王は一度言い始めたら止まらないからな。」

「ああ、かなり困るな……。」

正直王の命令なので断ることが出来ないし、あの王は他人の意見を全然聞かない。それでも部下からは愚痴の内容は大体こんな感じだ。私も打ち切った方が良いと思う。町や村がペガサスに襲われたという報告は受けていないし、伝説のモンスターに騎士だけで勝てるとわ全然思わない。つまり様子見がいいという感じだ。

「とりあえず王が招集するまでずっとこれだろうな。」

「そんな〜団長〜。」

「仕方が無いだろう……。あの王は種族に対しては平等だが地位に関しては差別をする人だ騎士団長だつて自分の駒としか考えていない。」

「やっぱ前代の王のほうがマシだな〜。」

「……そこは同意しよう。」

前代……つまり三代目の王様は種族の差別が少なからずあった才

ルアナ王国を一代だけで差別を大きく減らした王だった。ドワーフが宿屋に泊まるうとしたところヒューマンであった宿屋の主が泊まるのを断ったという事件を王様が耳にしたとき王様自らが宿屋に行き宿屋の主を捕らえ牢屋に送りにしたというのは有名な話だ。それ以外にもオルアナ王国の為に活躍した人は種族が何であれ褒め称え、報酬を渡し、人によってはエルフだろうとドワーフだろうと貴族の地位を渡したというのもある。

三代目の王は自分の事よりもオルアナ王国の国民の為に政治をした偉大な王だったと言われ四代目の王とはよく比べられる。

「だ、団長!？」

「何だ!？」

通信兵の騎士が急いで私に話しかけてきた。その様子からなにやら大変な事が起きたことは明白だが何だろうか。

「ヴェ、ヴェルズ帝国が宣戦布告をしてきました!」

「何!？」

宣戦布告……つまりオルアナ王国とヴェルズ帝国が戦争をするということ。

「団長は急いで首都に戻って作戦会議をし、他の部隊はモンスターの搜索に当たれとのこと。」

「モンスターとのことまだ諦めてないのかよ……。」

部下の一人が呟く。

「まあそういうな。私は転送魔法を使って首都に行く。ここのことは頼む。」

「了解しました。」

俺は急ぎ足で転送魔法専用の部屋に向かった。

視点変更 レオーナ 彰

アイツが行方不明になって五日がたった。五日前、午前九時頃アイツの母親が中々起きてこないので行ったらしいのまにか居なかったらしい。アイツの妹曰く午前一時頃お手洗いにいったときは部屋から明かりが見えたらしい。俺も「マジック・テイル」でアイツと午前二時頃まで一緒にクエストを受けていたので知っている。

アイツとは中学二年の頃からの友人だった。中学二年の頃にアイツを誘ってテストを受けたMMORPG。それが「マジック・テイル」だった。アイツはMMORPGをやったのは初めてだったらしいがアイツはドブプリハマった。アイツはあの頃クラスメイトの男子からのイジメに悩んでいたので「気持ちを切り替えるのにやったら？」と俺は誘ったのだ。

まあ、なんだかんだと言ったがハッキリ言うとアイツは何処に行っただろうか不思議に思う。こうやって冷静に思っではいるが、いつもはもつと馬鹿やっている男だ。高校のクラスメイトからはアイツがいなくなったからと分かっていて気を遣ってくれている。本当に何処にいったしまったのだろうか。ちまたの噂では「マジック・テイル」の異世界に行ったなどとも言われている。色々と考えつつも教室の窓から空を眺めて思う。

アイツ……白崎 陸は何処に行ったのだろうか？

第13話 村から出発！そして女王様の楽しみ（前書き）

お久しぶりです。  
久々の投稿です。



### 第13話 村から出発！ そして女王様の楽しみ

視点変更 彰 レイ

決闘の次の日、俺たちはまだシイラ村にいた。

「なんだかんだ言つて一日いちゃったね。」

「主にレイさんのせいですよ。」

『子供と遊んだし楽しかった。』

昼食を食べた後、子供達と鬼ごっこやらかくれんぼやらをして村の子供に誘われそのまま家に行き夕食を食べ、泊まってしまった。

ちなみに狼の集いのルルダンという男は回復魔法を使って治療をしてギルドの人達に渡したが狼の集いの人達に怯えられてしまった…… あきらかにお前ら年上だろ、何年下の少女にびびってんだよー 応冒険者でしょ。

「で、アリア今度こそ行くんだね？」

「あ、お父さん。行ってきます！」

「ああ、行つてらっしゃい。」

そして今度こそ別れて二人と一匹でハイナ教国首都に向かうのであつた…… 商人さんの馬車に乗つて。

「すみませんウイナさん。」

「まあいいが……。」

みなさんは覚えているだろうか？ ハイナ教国からシイラ村に来るまでに乗つてきた馬車に乗せてもらった商人さんだ。シイラ村

に来たときにウイナっていう名前だと判明した人だ、言っていないかったがヒューマンである。

「狼の集いのギルドマスターをあんなにアツサリ倒せるような人を無料で雇えるんならこつちも万々歳だ。」

「ふふ〜ん、私は凄いいんだよ。」

「ああ、今なら正直にそう思うよ。」

「レイさんですからね。」

『だよ〜。』

二人と一匹が俺に対してなんか暖かい目を向けてくる。

「何さ！みんなして普通に褒めて！」

「いやあ……レイさんは凄いひとだなあ〜って。」

「ああお嬢ちゃんは凄い人だ。」

『うんうん。』

「なんか普通に褒められると不思議な気持ちに……。」

やっぱりボケ担当なのかな……俺。

視点変更 レイ ハイナ2世

「女王様！」

「ん？何ですか？」

私は、首都の孤児院に見舞いに行った後、宮殿に戻ってきたときに女官に呼び止められた。私は、正直机に座っているよりも歩き回って民の声を聞く方が好きだ。母上は最初は傷ついた人の為に治療をずっとしつづけていたら、いつのまにか人々の中心になって

いて自然に村となり、国が出来たのがハイナ教国であり。母上が言った掟や思想などがハイナ教の聖書になつと私は母上から聞いてきた。

「そ、その国境の魔導隊の人達からの報告書が届いたのですが……。」

「緊急の問題ですか？ それとも伝聞機に不備があつたのですか？」

伝聞機……最近出来た魔力で動く道具であり、伝聞機から遠くの伝聞機まで文字を届けることが出来るという道具であり、今は試作品が国境付近に配備されている。まあ、急ぎの用事にしか使われないのですが……。

「いえ……伝聞機には問題がないらしいのですが。国境を通つたエルフ種の人に少し変わった人がいるらしいのです。」

「変わった人？」

「はい……魔導隊の人によるとハイエルフなんだとか。」

「まあ……ハイエルフなのですか！」

ハイエルフ……今じゃ私だけになってしまったと思っていた種族。母上からの遺伝でハイエルフになったのだが私以外にはいないというのにやや抵抗を感じた。だが私と同種の人はまだこの大陸に居るということに少しうれしくなってしまう。

「その人は今何処にいるか分かりますか？ 話をしてみたいのですが……。」

「すみません……そこら辺はわからないそうです。」

「そうですか……。」

その人はどんな人なのかとても気になっていたのだが居場所が分

からないという事にやや落ち込む。　その人と少しお話ししたかった……。

「そ、そんなに落ち込まないください！女王様！　とりあえずそのハイエルフの人を探すように国全土の教会に通達してみます！」

「ありがとうございます。　よろしく願いしますね。」

「はい！おまかせください女王様！」

今は会えないのはしょうがない。　その名も知らないハイエルフの人の事を考えながらも仕事をするために椅子に座るのであった。

視点変更　ハイナ2世　レイ

「ッ！？クシユン！」

『どうしたの？風邪でもひいた？』

「いや……誰か噂してるのかな？」

『？』

「そうだ……風邪といえば状態異常　病って何か分かる？」

「えっ？」

なんかアリアが「えっ、この人何言ってるの？」という感じの目を向けてくる。

「状態異常　病は様々な物があるんですよ。　例えば体力が徐々に

減ったり体が痛くて動けなくなったりとか……基本的には時間がた

てば自然に治りますけど、治りやすいものもあれば治りにくい物も

あるんですよ。」

「病気って事？」

「まあ、そうです。」

「あゝなるほど。」

つまりループの町ではとりあえず病気を魔法で治したって事かなるほど。

「ハイナ教国は南の方の国なんだよね？」

「はい、大陸では西南の方に位置しますね。オルアナ王国は真西に、ヴェルズ帝国は北西に位置しています。」

「見事にみんな西なんだね。」

「でもライヴアン同盟は南東の方にあるんですよ。鉾山があるとか何とか。」

「真ん中には国は無いんだね。」

「真ん中は大平原っていうんですけど、平原の主っていうモンスターが居て平原中を駆け回っているそうで、町なんかを作ったら平原の主に荒らされるそうです。」

「ふーん。平原の主ねえ。」

「どうしたんですか？」

「……捕獲できるかなあ。」

「……お嬢ちゃん本気かい？」

「とりあえずペガサスとスレイプニルと朱雀を出せばいけますかね？」

「私もいるよ！」

「そうだ黒猫さんが居た！」

「なんで言い伝えにしか出てこないようなモンスターばっか……。」

「……お嬢ちゃんは本当に何者なんだい……。」

なんかウイナさんがガクブルしている。　ってそうかスレイプニルがいるのか。

「そうだ！スレイプニルに乗ればすぐに首都に行けるじゃん！」

「だからそれは却下です！」

『個人的には楽しそう。』

「黒猫さんですか！」

「……若いってのは本当に良いねえ。」

馬車はゆつくりと首都へ走っていくのであった。

## 第14話 お礼とかつて大事だよ？byレイ

五日後、道中ではスライムの群れが出てきたのを「魔法 ファイアキャノン」で焼き尽くしたり、盗賊が俺の召喚したナイトウルフに襲われて涙目で逃げ回ったりといったことがあつたら比較的安全に進んだ。

「そろそろだな。」

「首都ですか？」

「ああ、首都ハイルズだ！ あの町はとても大きいからなきつとお嬢ちゃん達も驚くぞ！ 首都に来るのは初めてらしいからな。」

「はい！ 初めてです！」

「どんな町なんだろうね。」

『キャットフードはあるの？』

「キャットフードにこだわってるね……黒猫さん。」

普通の猫ならキャットフードよりも人間の食事を好みそうだが、ちなみに俺の家で飼っていた犬はドッグフードよりもテーブルから落ちてきた食べ物の方が好きだった。

木々に囲まれている道を馬車でゆっくりと歩く。

「けどこの国って首都の近くなのに木が多すぎじゃない？」

「エルフは元々森の中で暮らす種族ですから。 後、周りに森があれば精霊とも会話しやすいですから。」

「ああ、そっかあ。」

「それに、森の中ならエルフの独壇場だからな。 森の中ならヒューマンじゃあ相手にならねえ。」

「まあ、精霊に相手の場所を聞きながら戦うからね。」

『つまり周りが木が多い方がエルフの為になるからっていうこと？』  
「エルフの国だからね。」

皆には、赤い服を着たエルフの人達……魔導隊の人達だ。しかしエルフの人ってみんな若いな。シイラ村にもおじいさんおばあさんは居なかったしレオーナとかいう騎士団長も見た目は若かった。

「検問だ。」

「ああ、いいぞ。ライヴァン同盟から武器を運んできた。」

「ふむ、確認しよう……その子達は？」

「ああ、その子は「レイです！女王様に会うにはどうしたらいいですか？」ってオイ！」

ん？なんか普通に聞いたはずなのにウイナさんと魔導隊の人がボカンしてるぞ？ アリアは呆れたような表情をしている。黒猫さんは特に表情は変わってない……猫の表情って何かよく知らんけど。

「どうしたの？ウイナさんそんなに大声出して。」

「大声出すわ！いきなりどんな事聞いてんだよ！」

「だって会いたかったし……。」

「そんなに簡単に会えるわけじゃないですかレイさん。」

「やっぱ手続きとか必要なのかな？」

『人間は面倒臭いね。』

「えっと……確認出来ましたよ。」

ぎゃあぎゃああと騒いでいると苦笑いしながら魔導隊の男が話しかけてきた。



「ああ、ありがとう。」

「はい、どういたしまして。……あとそこのお嬢さん？」

「私？」

「はい、女王様に会いたいですよね？」

「まあね。」

「なんでそんなに誇ってるんですか……。」

俺が胸を張って答えるとアリアがやや呆れた表情で答える。ちなみに胸が大きくてワンピースなので胸がかなり強調されているのに気づくのはまだ先だった……。

「ま、まあお嬢さんは女王様に会いたいんだろう？」

「？何で顔を赤くしてるの？」

「な、何でも無い。」

魔導隊の男の人が顔を赤くしているが風邪気味なのだろうか？魔導隊の人を心配していると別の魔導隊の人が話しかけてきた。

「今度、ハイナ教国で冒険者限定の闘技大会があるんだ。ここで優勝できれば賞金と女王に直に会えるぜ。お嬢さんに実力があれば出てみれば良いんじゃないか？それ以外じゃあお偉いさんしか女王様には会えないぜ。」

『それって使い魔とかなり？』

「その黒猫は使い魔か！ 使い魔ならありな筈だぜ。」

「ありがとうございます！」

「っていうかお嬢さん首都に来るのは初めてか？ エルフは特に検問とかないけどエルフ以外の種族はスリとかする奴がいるから気をつけるよ。」

「はい！」

スリねえ……。スリといえば「マジック・テイル」の職業では種族によってはなれない職業がある。エルフなら盗賊になれず、ハンマーなどを使って戦う鍛冶職人という職業にもなれない。「エルフ以外」というのはエルフは盗賊にはなれないからスリたはしないという事なのだろう。

「まあ、ようこそハイルズへ！」

「おう！　でお嬢ちゃん達とはここで別れか？」

「まあ、そういうことだね。まあ、送ってきてくれたお礼とかした方がよいよね？」

「まあ、大事ですよねそういうの。」

「別にそういうの求めてねえしいいよ。」

「いいえウイナさん！　これは重要です！　相手に貸しを作ってしまうす！」

俺は、とりあえず白金貨を一枚ウイナさんに渡す。それを見てウイナさんが笑顔のまま固まった。あれ、おかしい事したかな？

「どうしたのウイナさん？　口の中に虫が入っちゃうよ？」

「どういふ警告ですか……。」

『けど気持ち悪い笑顔だなあ。』

「黒猫さん！　確かに思ったけど言っちゃダメ！」

「思っただんですか！？」

やっぱりおっさんの笑顔よりはかわいい女の子笑顔だよな〜っと思っっていると意識を取り戻したウイナさんが慌てて俺に聞いてくる。

「おい！　これって白金貨じゃねえか！」

「そうだけど？」

「いや、そうだけどじゃねえし……これが何Gか知らないのかよ！」

「何Gって……確か100万だっけ？」

「そうですよ。100万Gです。」

『もしかしてもっと欲しいの?』

「いや!?多すぎるだろ! 国同士の貿易でしか見れないような代物だぞ!」

「まあまあお礼なんだからもらってもらって!」

「いや……流石に多いと思いますけど。」

ウイナさんが受け取らないなあ……アリアも「そりゃ受け取る人は居ないよ。」っていう目で見てくるので俺はウイナさんに金貨一枚を渡す。

「いやいやこれでも多」いい加減もらわないと魔法を撃つよ?」……喜んでもらいます!」

ふむ、ちゃんとお礼をもらってくれた。お礼はちゃんとしないとね。俺が満足していると闘技大会の説明をした魔導隊の人が俺に話しかけてきた。

「そうだ!お嬢ちゃんその闘技大会冒険者しか出場できないが冒険者なのか?」

「え、マジで?」

「そりゃあ冒険者限定って言ってたじゃないですか……。」

「……なら冒険者に登録しなくちゃいけないか?」

冒険者……? ということとは仕事とかしなくちゃいけないのかな? 働きたくないでござる。

「……ねえねえ親切な魔導隊の人?」

「ん?何だ?」

「女王様って美人なの？」

「まあ、美人だなハイナ教国1じゃねーか？」

「よし！ 闘技大会に出る！」

「決めるの早！」

だって俺は見た目は美少女だけど中身はまだ男だもん！……まだ。

「レイさんってもしかして……。」

「ん？何？何かな？」

「……レズ？」

アリアが冷たい目でこっちを見てくる。　　っというかこっちの世界にレズという言葉があるのかちよつと驚きだ。

「ん？まさつかゝ男の魅力がさっぱり分からないってだけでけっしてレズではないよ。」

ホモじゃねえし。

「いや、それってレズに近くないですか？」

「お嬢ちゃん……まさかレズだったのかい？」

「ウイナさんは黙って。」

今大事な話してるんだ。

「いや、女の子は好きだよ？　けっしてレズじゃないよ？」

「矛盾してません？」

「いや？全然？性的な意味は決してないし……アリアは愛でたいっていつの？」

「愛でたいって……褒められてるんですか？」

「褒めてるよ〜可愛いんだもんアリア。」

「あ、ありがとうございます。」

アリアが顔を染めている。 う〜んやっぱり可愛いなあ……ッハ！マジでレズになってる気がする。 相当やばい気がする！……つてあれ？俺は元男だし女の子を好きな方が普通なのか？……いや、でも今は女な訳だし……。

『レイとアリアが固まっちゃった。』

「う〜んお嬢ちゃん達は大変だな〜何かと。」

## 第15話 冒険者登録と二人の受付嬢

「レイさん、レイさん大丈夫ですか？」

自分がレズがどうか考えてから約1分。      アリアが先に思考が復帰したらしい。

「ん？ワタシハレズダヨ。」

「レズかどうかは放っておいてどうするか決めましょう！」  
『っていうかレズって認めなかった？』

とりあえず、レズかはどうか俺の中では女が好きだ！      だからレズでいいやという結論で終わった。

「レイさんは闘技大会に出るんですよね？      後ウイナさんはもう行っちゃいましたよ。」

「あ、ウイナさんに別れ言っていないね。」

「まあ、お礼を渡したからいいんじゃないんですか。」

『とりあえず冒険者ギルドに登録しないと大会に出れないんですよ？』  
「う？。」

「そうですね……どうします？」

「登録しちゃおうか。」

「決断早！」

「だってしょうがないじゃん？      登録しないと大会に出れない。大会に出ないと女王様に会えないんですよ？      だったら登録するしかないじゃない。」

『じゃあギルドに行くの？』

「まあ、今することはそれだね。」

とりあえずすることも決まったし今からギルドに……。

「ギルド……何処だろ？」

「魔導隊に聞けば良いんじゃないんですか？」

「そ、そうだね。」

アリアさん流石ッス……。

首都ハイルズはループの町とは比べものにならないほど大きい町だ。町の中心には大きな木が一本生えており、そこから大きな路地があり、蜘蛛の巣状になっていた。

「ねえ、あの木ってユグドラシル？」

「レイさん、一般常識はないのにユグドラシルは知ってるんですか？」

「一般常識はないって……。」

流石に失礼だよアリア……。さてあの大きな木……首都の真ん中にある大きな木……ユグドラシルというのだがあれは「マジック・テイル」にもあった。確かエルフの種族専用の武器を買えたり、エルフの種族専用の魔法などを教えてもらえる。エルフの隠れ里にあった木だ。そこはエルフの種族しかは入れない里だった。

俺は「マジック・テイル」の時に何回も来た記憶がある。それ以外にも火山の麓にドワーフしかは入れない集落があったり、見た目が明らかに悪魔な感じの種族である魔族のみが入れる城なんていうのもあった筈だ。

「いや、ちよつと昔ね。」

「昔？」

「そつ、昔。」

「……まあ、言いたくないのならいいのですけど。」

「言いたくないこともあるのだよ。」

『あ、あれがギルドじゃない？』

アリアと会話していると、目の前には真つ白な二階建ての木造の建物があった。看板には英語っぽい字でギルドと書かれている。今更だがこの世界の文字は英語にそっくりだ。ちよつと癖のある英語のような形のため大体の言葉は読めた。

「ギルドっぽいね。」

「良く思つたら狼の集いの人達も大会に出るためだつたんですね？」

『さあ？』

「とりあえず私に勝負を挑んだから自業自得だね。」

「いや、一応お父さんの依頼ですけどね。」

「知らないよ。私に勝負を挑んできたのには変わらないもの。」

わたしと勝負なんて60年早いわ！

とりあえず二人と一匹でギルドの中に入る。ギルドの中はカウンターのような場所がありそこにはかわいいドレスを着た女性が三人並んでいる。それ以外にもテーブルと椅子が置かれており、椅子に座りながら酒のような物を飲んでいる人が何人が居た。その、座っている人達が皆俺たちを見ている。俺は無視してカウンターに立っている女性の中で一番巨乳な人を選んで話しかける。



「すみませーん。」

「あ、はいなんでしょう?」

カウンターの女性はのんびりとした口調で俺に呼びかけてくる。

「ここで冒険者として登録したいんですけど……大丈夫ですか?」

「はい、15歳以上なら誰でも登録できますよ。」

この女性(多分受付嬢)は15歳以上ならいいらしいが。

「何か、確認とかしないんですか?」

「ここに来たのだから15歳以上でしょ? それにあなたはエルフですから確認しなくても大丈夫ですよ……きつと。」

「きつと!?!」

アリアが驚いた声を上げた。そして、その受付嬢に対して隣のカウンターの女性が注意する。

「ちよつと、流石に一通り確認はしないと……いくらハイナ教でもそこら辺はしっかりしないと。」

「でも……。」

「でもないの。冒険者は一歩間違えば死んじゃうような大変な仕事よ。その仕事の依頼の管理を任されているの、実力に見合わない依頼はこなさせないようにしなくちゃいけなかったりするんだからしっかりと確認はしないと。」

「はい。」

俺の前の受付嬢は隣のカウンターの人にに言われた後、少ししゅんとしつつも俺たちに話しかけてきた。

「え〜と……じゃあ銀髪のあなたが冒険者志願？」

「はい！」

「黒髪のあなたは？」

「連れです。」

「じゃあ、黒猫は志願者？」

『んな訳ないでしょ。』

「……えっ？」「」「」

何故かテーブルから見ていた人達も驚きの声を上げていた。盗み聞きしていたのか……。しばらく黙っていたが隣の受付嬢の人が驚きつつも声を俺たちに掛ける。

「いや、まさか使い魔だったなんて……あなた達のペットかと。」

『ペットとは失礼な。』

「確かに失礼でしたね。え〜と……ああ、これこれ。」

「何これ？」

受付嬢のお姉さんが何処からかA4サイズの紙を取り出してきてこっちに渡してきた。

「これは？」

「この名前はね……何だっけ？」

「年齢検査紙ね。名前はそのままま何だからちゃんと覚えなさいよ。」

「うう……ごめんなさい。えっと、これはこの紙の上に手を置いてしばらくすると紙の色が変わるの。0歳から14歳は黄色、15歳から20歳は青色、21歳以上は赤色になるの。」

「じゃあ、手を置けば良いのね。」

「はい、その通りです。」

俺は、紙の上に手を乗せる。こうして見ると俺の手はかなり真っ白だと再度認識させられる。

「うーん、そろそろいいかな？」

「意外と早いね、もつとかかるかと思ったよ。」

「昔は5分もかかったのよ。こういう所も技術が上がってるのよね。」

隣の受付嬢の人が感慨深そうに話す。確かに紙の上にずっと手を乗せておくのは面倒くさいな。

「色は……青色ですから大丈夫ですね。じゃあ、この紙に名前と得意な武器とかを書いてください。種族はエルフ種ですよね？」

「ん？そくだよ、エルフ種だよ。」

エルフ種と聞かれたので合っている。俺はエルフではないがエルフ種ではある。俺は紙に「レイ」と書き、武器には悩みつつも弓と書いておいた。「マジック・テイル」の頃によく弓を使っていたから間違っではないない。

「書き終わりましたよ。」

「はい、ではギルドカードを発行しますので30分程したらここに取りに来てください。」

「はい……あ！そくだ！闘技大会に出場したいんですけど、何処で大会登録できますか？」

俺の言葉を聞き、隣の受付嬢が少し不思議そうにしながら聞いてきた。

「もしかしてあなた……大会に出るためだけに登録するの？」

「はい！」

俺が答えると、周りで俺の様子を眺めていた人達が笑い出す。

「おいおい、マジかよ……。」

「あんな小娘と戦いたいな……。」

「たくさんの観客の前でいじめるのか？ やめとけよ。」

なにやら周りがざわざわしている。 やっぱりこの姿だと相手になめられることが多いな……。

「本気？ 闘技大会は優勝すれば金貨五枚っていう大金が手に入るけど、下手すれば死んじゃうし、相手はエルフだけじゃない、ライヴァン同盟やオルアナ王国からも冒険者は来るんだよ？」

「別に金貨五枚には興味ないよ。 私は女王様に会いたいただけだし。」

「

「女王様？……ああ！確か女王様と会食も望めばできるんだっけ？」

「いいよねえ……。」

「あなたはギルドカードをしっかりと作りなさい！」

「す、すみません……。」

ギルドカードを作っている受付嬢の人がとなりの人に怒られているが、俺は話を続けることにした。

「私は、女王様とお話がしたいの。」

「なるほどね……確かにエルフの冒険者にはそういう事考える人もいるけどあなたみたいな若い子は初めてよ。」

「へえ。」

「あ！それならギルドカードを作るついでに大会の登録もしておくね。」

「本当ですか！　ありがとうございます。」

「大会の登録は私がするわ。　あなたはギルドカードをちゃんと作  
りなさい。」

「はい。」

「そういえばお名前は？」

「ん？私？私はアルカ！」

「もう……また手が止まっている！　私はサラよろしく。」

「よろしく願います！」

おっとりとしたアルカさんと真面目に仕事をしているサラさん。  
二人は中々仲が良いようだ。

## 第16話 交友関係が広がるのは良いことです

「あ、ギルドカード出来ましたよ。」

「本当！？もう出来たの！？」

「レイさん30分は喋り続けてますよ。」

アリアとアルカさん、サラさんと喋っていたらいつのまにか30分たってしまったようだ。

俺は転成する前から喋るのは好きだった。あの俳優が格好いいという話にはついて行けなかったが、あのアニメはおもしろいという話なら女子と1時間喋り続けるのは良くあることだ。

「はいこれ、最初はランクEからです。ランクEの依頼しか受けられないけどそこら辺は勘弁してねみんなスタートは一緒だから。」

「はい、ありがとうございます。」

「後、一ヶ月に一定量の依頼をこなさないとランクが下げたり、ギルドカードを没収されたりっていう制裁措置があるから気をつけてください。」

「ふむふむ。」

つまりある程度依頼はこなさなくちゃいけないのか。女王様に会うためとはいえ面倒臭い……。俺がギルドカードを眺めているとアリアがアルカさんに尋ねる。

「最高ランクは何ランクなんですか？」

「アリアちゃん良いこと聞くね。」

「まあ、冒険者にはなりませんけどね。」

「いつかあったときのために教えとくね。」

「なりませんって。」

「最低ランクはEでそこからD C B A になっていて最高ランクはSなんだよ。」

「無視ですか。私の言葉は無視ですか。」

『アリア、ドンマイ。』

アリアが軽くスルーされたことに涙目になりつつも抗議しているのを黒猫さんが宥めている。黒猫さんとアリアも二人と仲良くなったなあ……と俺はほのぼのと眺めている。

「話している所悪いけど、大会の申請も出来たよ。」

「本当!？」

「何でこんな所で嘘着かなくちゃいけないのよ。」

「あ、それもそうだね。」

「……あなたってアルカとそっくりね。」

「そう?」

サラさんがやや呆れつつも俺を見ている。まあ、アルカとは会話がよく合うけどアルカさんと俺はそっくりなのだろうか? アルカさんはすぐに会話に意識がいつちゃって手作業がよく止まるようだ。

「私も、レイさんとアルカさんってそっくりだと思います。」

「アリアちゃん……私たちって気が合いそうね。」

「サラさん……。」

「アリアちゃん……。」

『二人共何握手して見つめ合ってるの?』

アリアとサラさんは二人でなにやら意気投合しているようだ。

「とりあえず大会のルールを説明するね。」  
「はい。」

サラさんが別の受付嬢に呼ばれて裏に行ってしまったので会話をひとまず止めて大会の説明をしようと言ったことになった。

「大会は一週間後、首都ハイルズにある大闘技場で行われます！」  
「おお！」

「この大会はヴェルズ帝国以外の大陸全土から冒険者が集まるのだけれども……今回は出場する人は少なめね。」  
「何で？」

「何でも、オルアナ王国とヴェルズ帝国がまた戦争するっていう噂があるらしいね。」

「本当ですか！それ。」

「ええ、結構信憑性高いらしいよ。戦争があればオルアナ王国内のギルドで戦争に参加する依頼とかが出るの。そういう依頼は報酬金がとても高いから大会よりもそっちに参加しようっていう冒険者が多いらしいね。」

「それに対してハイナ教国は？」

「戦争には参戦しないらしいね。この国は今までもあの二つの国の戦争には参加しなかったから。あ、でも大金と交換にオルアナ王国に魔法を教えたりはしているけどね。」

「そこら辺は知ってた？ アリア。」

「まあ、常識と言ったら常識ですね。後はハイナ教国でしか作れない生地を輸出したりしてますよ。」

「その生地も魔法が無くちゃロクに加工が出来なかったりするからなんですけどね。」



やっぱりハイナ教国の収入源は全て魔法のようだ。　流石エルフの国。　魔法の文化が様々な事に使われているようだ。

「話を戻すけど、明日で大会の参加の申請は締め切って対戦相手をルーレットで決めるの。それで決まった対戦表を5日後、首都ハイルズの至る所に張り出されるから見てね。」

「大会当日の集合時間とかって決まってるの？」

「大会当日は午前9時に大闘技場の受付の人に話しかければとりあえず大丈夫です。　後、試合は一对一の真剣勝負で勝ち抜き戦だと思うてもらえばいいかな？」

「まあ、大体言いたいことは分かったよ。」

『試合中に使っても良い道具とかは？　使い魔とかはあり？』

「……黒猫さんやる気満々ですね。」

『そろそろ目立たないと。』

「なんか切実……。」

黒猫さん……そんな事考えてたんだ。　意外と目立ちたがり屋？

「安心して黒猫ちゃん。　使い魔は直接なら一匹持つて行っても良いし、【召喚】を使うなら何体でも試合中に出していいんだよ、まあ出せる人はいないけどね。　あ、でもアイテムは使う武器と装備だけで回復アイテムとかは持つて行っちゃダメだよ。」

『じゃあレイ！』

「もちろん！黒猫さんと闘うに決まってるじゃん！」

『流石ご主人様〜！』

「なんか呼び方がランクアップした！？」

アリアも驚いているが俺も驚いている。　黒猫さんがこんなテンション上がるとは……。

「まあ、大体の事は言ったかな？」

「はい、ありがとうございます。アルカさん。」

「ま、仕事だしね。応援してるよ。レイちゃん。」

「はい！」

『久々に本気出す。』

「期待してるよ。黒猫さん。」

「二人とも応援していますからね。」

「アリアに応援されたらもう、やる気出て魔法乱射しまくっちゃうからね！」

「それはやめてください。」

俺たちは話しながらギルドから出てハイルズの町を見学することにした。

視点変更 レイ ハイナ2世

「そろそろ闘技大会ですね。」

「はい、女王様。女王様には開会式に出席してもらい、試合の見学してもらいます。」

私はこの大会が好きだ。この大会の時には政治の事を考えず純粹に試合を楽しむことが出来る。オルアナ王国とヴェルズ帝国が開戦寸前だと言われているがいつも通りこの国は中立を表明するがこの国も警戒をきつくしなければいけない。それでも大会は無事開かれることが決定した。

「この大会にハリエルフの方が出てくればいいのに。」

「そうですね……そしてその方が優勝してくれて会食と一緒に……とか考えてませんか？」

「あ、どうしてそのことを。」

「顔に出てますよ。」

そういえばここ最近はずっと名も知らないハイエルフの方の事ばかり考えている。これは本に書いてあった恋みたいだなあと少しロマンチックな事を考えて少しほえむ。

「そういうすてきな事があればいいのに……。」

「あつたら奇跡ですよ。女王様。」

「そうですね……。」

そういう奇跡を少しだけは私は期待しているのだった……まるで物語の王子様を待つ子供のように。

## 第16・5話 ハイルズの夜 宿屋にて（前書き）

注意！ 今回の話は作者の頭のねじとかが無くなったせいで内容がひどいです。 ゲームのキャラクター、タイトルとかが出てくるのに嫌悪感を覚える人は見ない方が良いでしょう。 後、この話を見なくても別に大丈夫です。

## 第16・5話 ハイルズの夜 宿屋にて

視点変更 ハイナ2世 アリア

いきなりだが、レイさんは寝てるとき寝言を言うことがある。たいしたことではないのだが時々「キングクリムゾン！」だとか「ティロ・ファイナーレ！」などといきなり叫ぶため時々びっくりしてしまうことがある。何かの呪文なのだろうか？今度レイさんにも聞いてみよう。

私たちはハイナ教国首都ハイルズにやってきて、レイさんがギルドで冒険者として登録をし大会の参加申請も終えた後、首都を観光した後、宿屋に来て食事を取った後風呂に入り、もう寝るところだ。レイさんは何故か私と風呂に入るときは顔を赤くして、私を見ないようにして入ってしまう。他の人と入るのがそんなに恥ずかしいのだろうか？

「じゃあ、もう寝ようか。アリア。」

「はい、おやすみなさいレイさん、黒猫さん。」

『おやすみ……。』

今日泊まっている部屋はダブルベッドの部屋であり、レイさんと黒猫さんが一緒に寝て私がもう一つのベッドに寝る事になった。

「いや……だから、一番は優雨だつてば……。」

ベットに入ってから大体2時間くらいがたっただろうかいきなり

レイさんが変な事を呟き始めた。　ユウ？誰かの名前だろうか？

「雅楽乃……あの子もいいけど一番は優雨だよ。」

ウタノというまた別の人の名前が出てきたが一番いいのはユウという人らしい。　そこからしばらく何も言わなくなったが。　レイさんがボソリと

「アリア……はあ、かわいいなあ。」  
「へ？」

え？いきなり何で私が出てくるんですか？　ついさっきまで別の人が夢に出てたんじゃないですか？

「ん？誰だつて？……ああ彰は知らないのか俺よりも年下だけど……可愛い子なんだよあ。」

アキラって誰ですか！？また新キャラ出てきましたよ！？っていうか一人称が俺になつてるし……。

「どこら辺がいいってそりゃあ……やっぱり真面目な所かな。」  
俺の間違いをしっかり指摘してくれるし、可愛いしね。」

レイさんの寝言は聞かない方が良くかも知れない。　恥ずかしくて死にそうです……私。　ちなみにレイさんの寝言で起きた黒猫さんが私のベットに入ってきました。

「彰に勧められてやった……おとク2だっけ？　あれ中々面白いね、気に入ったよ。」

またよく分からない単語が出てくる。　レイさんの寝言は多分誰かと会話をしているのだろっ。　サッパリ分からないが。

「男子が女子校に通うなんて斬新な設定はびっくりしたよ！」

なんだかものすごくおかしい事を言っているような気がする。よく分からないけど。

「俺だったらいけるかも！？ふざけるなよ！彰！」

『アリア……寝れないからどうにかして。』

「ごまんなさい……無理。」

黒猫さんが眠たそうにしながら私に訴えてきた。　中々かわいい

……。

『何なでなでしてるの！やめて！離して！』

「かわいい……はああ」

『うう……夜怖い……。』

「怖がっているのもかわいい……。」

黒猫さんをそのままなでていると。　黒猫さんが『……【補助

変身】』と呟いた瞬間黒猫さんが白く輝いたと思ったたら灰色の髪の少女が目の前に現れた。

「もう！離してっば。」

「えっ？黒猫さん？」

確かレイさんが「黒猫さんは変身して人になれるんだよ。」とか言っていたような気がする。　　っと言うことは目の前にいる美少女は黒猫さん！？

「黒猫さん……なの？」

「うん、そうだよ？　っていうかアリアちよつと大丈夫？　頭打った？」

私の手から離れて心配そうな顔をしながら私の額に白い手に乗せてくる。それを見て私は。

「か、かわいい！」

「えっ？　っきゃあ！」

思わず抱きついた。

「わっ！　ちよつと！　アリア！？」

「もう、ちよつと！　後、一時間くらい！　こうさせてええええええ！」

「にゃああああああ！？」

黒猫さんが悲鳴を上げる。　もう、黒猫さんがかわいいからどうでもいいや……。

視点変更　アリア　レイ

「……何これ？」

朝起きて、アリアが寝ているベットに目を向けたがカオスな光景になっていた。裸の黒猫さんに抱きついているアリア……涎を出していてとても幸せそうな顔をしている。



「ご、ご主人様……助けてえ……。」

「な、何があつたの？」

「アリアが……抱きついてきた。」

「は……はあ。」

俺はアリアの意外な一面を見た気がした。

## 第17話 初めての依頼（前書き）

今回の話はちょっと自分で書いてて意味不明になったところがいくつかあるので分かりづらい所があると思います……すみません。

## 第17話 初めての依頼

「……」  
「……」  
『……』

宿屋の部屋にいるのだがなんか空気が重い……主にアリアの周りが。

朝起きてからアリアがずっと黙っている。俺がボケてもほつぺたをぺちぺちたたいでも全く反応しない。時々黒猫さんを見て顔を赤くして顔を伏せてしまう。こ、これはまさか……。

「アリア、もしかして黒猫さんの事が……。」

「……？」

「……好きなの？」

「は？」

多分そうに違いない、高校ではさんざん女子から恋愛相談を受けていた俺だから分かる。きっと夜に黒猫さんに抱きついたのはそれが理由だろう。

「い、いやレイさん？」

「分かってる、分かってる私の事は気にせずにどうぞ。」

「どうぞって何を！？ 違いますから！」

『もしかしてアリア……。』

「違いますってば！」

アリアの突っ込みが宿に響くのであった。

「ふむふむ……じゃあ、アリアは黒猫さんがついついかわいくって欲望にかられて抱きついちゃったと。」

とりあえずアリアの言い分を黒猫さんと一緒に聞いていた。アリアの理由はしっかりしていると思う（俺の中で）。

「……不本意ですが事実です。」

「まあ、黒猫さんの変身した姿はかわいっていうのには同意するよ。」

「同意するんですか……。」

だって黒猫さんのあの姿はかわいすぎるよね。うん、分かる分かる。

『そもそもご主人様の寝言がうるさいのが原因。』

「え？何か言ってたの？」

「色々と言っていましたよ。アキラとか何とか。」

「……へ、へえ〜。」

アキラ……ああ、彰か。  
ついでに彰も 柊 彰俺が高校生だった頃の数少ない

い男友達だ。俺が「マジック・テイル」を始める理由を作った人でもあるから俺の中ではそこそこ重要？な人なのかもしれない。

確かに夢に出てきたような気がしなくもない。彰も「マジック・テイル」をしており確かネコミミが特徴的な獣人族で盗賊だった。

「昔の友達ですか？」

「まあ、そんなもんだね。少ない男友達の一人だったね。」

『ご主人様って友達いたんだ……。』

なんて失礼な事を言うんだこの使い魔は。

「……どうしてそう思ったのかちよつと聞きたいんだけど？」

『だって常識知らずだし……。』

「確か森の中で引き籠もり生活してたんじゃないでしたっけ？」

「うぐっ……ま、まあそうだけど。友達くらいはいたよ。」

自分で決めた設定の事をすっかり忘れていたのは内緒である。

宿屋を出てギルドに二人と一匹で辿り着いた。ギルドの中にある木製の掲示板があり、そこに依頼の書かれた紙がたくさん貼られている。そこらへんは「マジック・テイル」の頃と変わらないようだ。俺は、掲示板の依頼を眺める……ポーションの納品やライヴァン同盟までの護衛等の依頼がありその紙一つ一つに判子でE、Sのうちのどれかが押されている。

「色々あるね。」

「依頼受けるんですか？」

「まあ、大会まで暇だしね。」

何をしよう……ゴブリンの討伐Eランク……犬を探してくださいEランク……Eランクでも色々あるな。俺は、掲示板の中の依頼の中から一枚依頼を選び、掲示板からはがす。

「よし、これにしよう。」

「……えーつと決闘の助太刀求む？」

「また決闘絡みですか？」

「……だって楽そうだしそれに今日までらしいからね。」

「意味わかりません。」

『というか何で決闘がEランクなの？もっと高いと思ったのに。』

「理由教えてあげようか？」

ん？後ろから何か声が聞こえてきたので後ろを振り向く。 振り

向いた所には真面目な受付嬢のサラさんが立っていた。

「あ、おはようございます。」

「おはよ。」

「おはよ。そして依頼を受けるの？」

「はい！大会まで暇なので。」

『で、何でこの依頼のランクが低いの？』

ふむ……黒猫さんが聞きたいことを聞いてくれた。 決闘なんて中々やばそうな雰囲気にする依頼なのに何故Eランクなのか俺も聞きたかった。

「そりゃあ……決闘なんて言っただってせいぜい人対人じゃない。

人対モンスターの方が遙かに危険だから決闘は高くてもDランクくらいにしかないのよ。」

「なるほど……。」

「まあ、それでも決闘の中には凄い冒険者と闘う事になったりするから危険かと言われたら危険ね。」

「ふーん……じゃあ、受けるよ。」

「了解。これは今日までの依頼だからね。 とりあえず依頼者がユグドラシルの木の近くの広場で10時に待っているらしいからそこに行つてね。」

「うん、ありがとう！ サラさん。」

「どういたしまして。」

『そういえば、依頼がちゃんと出来たかとかはどうやって分かるの？』

あ、そういえば聞いておきたいな。 「マジック・テイル」の頃はやればすぐに依頼が完了したからそこら辺分らないな。

「ああ、依頼者に依頼完了書っていうのを渡してあるから、そこに依頼が出来たっていうことを証明してもらってから受付嬢に渡してね。」

「はい、サラさん何から何までありがとうございます。」

「いやいや、アリアちゃん。 受付嬢ですから冒険者達に聞かれたことは何でも答えなきゃね。」

『なんとというプロ根性……。』

「……常識じゃないですか？」

黒猫さんが変な所で関心しているのとアリアが微妙に呟く。

「レイさん……そろそろ10時じゃないですか？」

「えっ……ホント？」

『9時45分。』

「後、15分ね。」

「い、行くよ！ アリア！黒猫さん！」

「え、ちよっ！ 待ってください！」

『ご主人様って足速いよね。』

とりあえず俺たちは急いでユグドラシルの近くの広場に向かった。

走り続けて広場らしき所に辿り着く。黒猫さんはもう来たようだが。アリアはまだ来てないようだ。広場には仲よさそうなエルフの夫婦と赤ちゃんがいる……とは言ってもどちらも20歳くらいにしか見えない。エルフの見た目は20歳まではヒューマンと同じように成長し、それから成長が殆ど止まってしまうらしい。ちなみに俺が若いって言われるのが見た目がエルフから見ても17歳くらいだからそうだ。

俺は広場を見渡して依頼人らしき人を探す。決闘なんて言ったってそこら辺の男どうしの喧嘩程度だろうと俺は思っていたので若そうな男を探す。

「レイさん……速すぎます……。」

『アリア遅い。』

「黒猫さんは猫だからね。」

息を切らしてやってきたアリアが合流してきたので搜索を再開する。今いるのはエルフの夫婦と赤ちゃん、それとやや豪華なドレスを着たエルフの女性とヒューマンの執事らしき人……ヒューマン？

「ねえ……アリア。」

「は、はい？何ですか？」

アリアがまだ息を切らしているがちゃんと聞き返してくれた流石アリア。

「ハイナ教国のお金持ちの家には執事とかっているの？」

「まあ……執事とかはいますけど……大体がエルフですね。ハイ



ナ教国ではエルフが一番信じられる種族っていう状態ですから。

ヒューマンは珍しいですね。」

「よし！聞きに行こう！」

「何を！？」

「あなたが依頼主ですかって聞くんだよ。 こういうときは異常な姿をしている人は大体異常な悩みを持っているものさ。」

『分かったような…… 分からないような。』

黒猫さんが戸惑っているが俺はあえて無視して豪華なドレスのエルフに話しかけに言う事にした。

## 第18話 またまた決闘

俺はダツシユでドレスを着ているエルフに話しかけに行つたのだが……。

「お嬢様！危険です！」

「え？」

ヒューマンの執事がいきなり前に出てきてドレスを着たエルフの人のちよつと間の抜けた声が発せられた。

「え？何？私危険なの？」

「当たり前だ！ いきなりお嬢様に走つてきて……アントシア卿に雇われたのだな？」

「は？ アントシア卿？」

「とぼけても無駄だ！」

いきなりヒューマンの執事が意味不明な発言をしてきたと思つたらいきなり殴りかかつてきた女の子に殴りかかってくるとかおかしくね？ こっちはかよわい（見た目は）エルフの美少女（自称）だぜ？

「そりゃ！」

「な、何！？」

だがエルフマスターは伊達じゃない！ 執事の腕をうまくつかみ一気に上手投げをする……こんな技「マジック・テイル」には無かつたがレベル500というステータスのおかげで相手が男だろうと難なく空手の技が出来た。

「クッ……！」

「……とりあえず、話を聞いてくれますか？」

「アントシア卿に雇われた者に聞くことなどない！」

「……とりあえず話を聞きますせん？ アントシア卿の使いとは思えません。」

「ですがお嬢様！」

『なにになに？ 何が起こったの？』

「さあ……？」

俺に追いついてきたアリアと黒猫が今の状況に首を傾げていた。

状況説明後

「すみません……まさか冒険者ギルドで依頼を受けてきてくれたとは……。」

「申し訳ございません私の執事が不届き者で……。」

数分後……とりあえず二人から話を聞いた所、大体の状況は掴めた。目の前に居る執事曰くエルフのお嬢様はとりあえずオルアナ王国の貴族で執事はお嬢様に仕えているらしい。そしてエルフのお嬢様にお見合いの話が出たのだがはつきり言々と相手があまりいい男じゃなかったらしい。お嬢様曰く「自分の父親の自慢ばかりして何にも出来ない坊ちゃん」でお嬢様は遠慮したのだが、その男がしつこく訪問してくるのでエルフが中心の国……ハイナ教国に逃げてきたのだが、ここにもやってきたので追い払う為に決闘を申し込んだらしい。

お嬢様の方が勝つたら二度と関わらないこと、男の方が勝つたら婚約の話をお嬢様が受諾すること。それで決闘をしてくれる

人を探していたのだが今日まで誰も依頼を受けてくれなかったのでしょうが無いから執事に出てもらおうかと思っていたらしい。

「ふむふむ……じゃあ私が出れば問題無しだね！」

「本当ですか！？」

「まあ、私をいとも簡単に倒したのですから実力はありますね。」

なんだこの執事偉そうだな。

「まあ、みなさんとりあえずここで待っていていれば決闘の相手は来ますのでしばらく一緒に待ちましょうか。」

「はい。」

「レイさん！ もうちょつと気を締めとかないと……。」

『大丈夫でしょ？ ご主人様だし……。』

とそのままお嬢様なエルフとしばらく喋りながら待つことになった。

「ふむふむ……つまり今のオルアナ王国は腐っているというのかね？」

「その通りです！ いつもいつもヴェルズ帝国と戦争ばかり！ もっとハイナ教国やライヴァン同盟と親睦を深めるべきです！」

『何でこんな会話になった……。』

「……お嬢様は今の王国に不満があるそうなので。」

喋ること約5分最初はあのお菓子がおいしいという話をお嬢様の方から喋ってきたのだがしばらくしてから急に政治の話になり、お父様のあそこがだらしがない、ここがダメだという話にいきなり変わっていた気づいたらオルアナ王国の不満を彼女はぶちまけていた。本当にどうしてこうなった……。

「ちょっと？ 聞いていますか？」

「あ、うん。 聞いてるよ？」

「まず、今の国王になった途端のヴェルズ帝国の批判から、貴族は所詮己の駒という発言から…… 自分の支持率が低いという事に気づいているのかしらあの王は。」

「あ、うん、どうだろうね。」

はつきり言って分け分らない。 分かったのは今の国王がろくでもないっていう事ぐらいしかない。

この話をどう聞き流そうか考えていると、目の前に場所に不釣り合いな鎧を着たドワーフらしき毛むくじらの男と派手な青い服を着たヒューマンの男、そして燕尾服を着たヒューマンのじいさんが広場に現れた。

「げっ…… アントシア卿。」

「あの人がですか？」

「ええ、お嬢様に何度も求婚をしてくる。 ストーカーまがいの坊ちゃんです。」

『明らかにナルシストだね…… 間違いない。』

「黒猫さん…… そういう事は黙つとかないと。」

「アリアもそう思ってるんだ。」

アリア意外とひどいこと考えてるんだなと内心思っているとあ

こちらの集団が気づいたのかこつちに歩いてくるのだが派手な服着た男の歩き方がかなり自身満々だ。歩き方でその人の性格が分かっていうのは本当のようだ。

「御機嫌ようアントシア卿。ちゃんと約束は守ってくれますか？」  
「もちろんだよ、ちゃんとそっちも約束は守ってくれよ？ それにしてもそちらは誰が決闘をするのかな？ そちらの体の細い執事さんかな？」

アントシア卿の言葉を聞き、後ろのドワーフの男が豪快に笑う。  
逆に執事の方はやや苦い顔をする。あのドワーフに俺が勝てないとも思っただろうか？

「いえ、私です。私の相手はそちらのドワーフの方ですか？」  
「おう！ アントシア卿に依頼された！ お嬢さんだからと言って手加減はしないぞ？」  
「こちらこそ。本気でいきますよ？」

俺たちのにらみ合いを見ていたアントシア卿がやれやれといった風に俺とお嬢様を見てくる。

「おいおい、まさかこのエルフの少女が決闘の相手かい？ 言っておくけどこつちのはAランクの冒険者で一人でウルフを狩った事もあるぞ？ 本当に大丈夫か？」

「ウルフってレベル20くらいしかないじゃない。問題無いわ。」

アントシア卿をにらみ返しつつも反論をするがアントシア卿はただの空元気だと思っているようだった。

さて広場で勝手に決闘なんてしていいのかと思ったがどうやら決闘することはあらかじめ報告してあるようだ。周りには魔導隊の人達が結界を張っていたり、審判をしたりするようだ。他にも野次馬が集まってきている。野次馬の中にはエルフの民間人らしき人もいれば、冒険者のような服装の人もいる。

「ルールを確認します！ 降伏、もしくは気絶したほうが負け！ さらに戦闘不可能と魔導隊の人に判断されても負け！ それでいいですね？」

「おう！ それでいいぞお嬢さん！」

俺のルール確認に対して相手のドワーフが返事を返す。俺はヴァイオリンを構える。魔導隊の人が結界を張っていて外には衝撃が来ないらしいが俺が本気出せば壊せそうで怖いので加減ができる精霊術士の装備で行く。

「では両者共準備はいいですね？」

「おう！」

「はい！」

「では、開始！」

魔導隊の審判の合図から決闘の火ぶたは落とされた。

視点変更 レイ アリア

結界の外からレイさんを見る。レイさんの装備は前の決闘の時と変わらず白いワンピースにヴァイオリン、そしてヒール付きのパンツスを履いている。周りの野次馬にはあきらかにレイさんに闘う気があるのか？という目を向けている者もいる。

「ねえ……本当に勝つ気があるのかしら？」  
「さあ……。」

依頼者の二人は心配そうにレイさんを眺めている……まあ、闘うのに武器がヴァイオリンなら当然の反応だろう。

「レイさんなら大丈夫じゃないですか？」

「そうは言いますが……。」

「では、開始！」

まだお嬢様は心配そうにしているが、決闘の合図が起きた。

レイさんに相手の冒険者が一気に近づく。相手の冒険者は大きな体に斧といういかにもな姿だ。レイさんは素早く弦を動かし、ヴェイオリンを弾き始める。

「あの人は本当にやる気があるのか？」

周りから馬鹿にする声が聞こえるが、レイさんは聞く耳を持たずに弾き続ける。意外とちゃんと曲を弾いていて周りの野次馬には「良い曲だ……。」などと呟いている人もいるが相手の男が斧を振り上げたのを見て私は思わず叫んだ。

「レイさん！」

「問題無い！」

あ、ちゃんと返事してくれた。……それはそうと相手の男が斧を振り下ろすギリギリの所でステップを踏みながらかわす、その時も曲のテンポが全く変わらない。その後すぐに相手の鎧に蹴りを入れたのだが、蹴った瞬間に相手の鎧にヒビが入り相手は吹っ飛び



結界にぶつかる……レイさん高性能すぎない？しかもワンピースだからパンツが見えかけましたよレイさん。

「グッ!？」

「モンスターの突進をくらったみたいだ！」

結界を張っている魔導隊の人達が苦悶の声を上げる。レイさんの蹴りでモンスターくらいって何者ですかレイさんは!？そして蹴ったレイさん本人は周りに白い球体がいくつか集まりながら一言発する。

「さあ、行くよ！」

その言葉と同時に白い球体からビームがいくつかが飛ぶ。前の決闘の時也使った技だ相手の男は苦しみつつも急いでよけるが白い球体がいきなり爆発し、男がさらに吹っ飛ぶ。

「あれはまさか……精霊から力を借りて【魔法】を使っているのか!？」

野次馬のエルフがボソリと呟く。そういえば前の決闘の後にそんな事言っていたような気がしなくもない。周りがざわめく中、レイさんが男に対して聞く。

「降伏してくれば、もう痛い目に遭わないで済むけど？」

「ふざけんなよ！お嬢さん！俺をなめるなあああ！」

男が叫びながらまさしく、最後の力でレイさんに突っ込むがレイさんはため息をつきながら一言。

「そう、体がどうなっても知らないわよ？【魔法 フェアリーボム】」

レイさんが言った途端、レイさんの周りの白い球体が全部一気に輝き爆発する。

「うわぁ！」

「結界が壊れたぞ！」

「目があ！ 目がああ！」

「別に失明はしてないだろうから早く確認をしろ！」

魔導隊の人が混乱している中、レイさんの鈴のような声が一つ。

「あゝ。 相手の方が気絶したので勝ちで良いですね？」

爆発による煙の中汚れ一つないワンピースを着たレイさんが優雅に立っていた。

第19話 様々な雑談（前書き）

レオーナ……久々に出たのに……この扱い

## 第19話 様々な雑談

視点変更 アリア レイ

「派手にやったらしいね。噂はもう流れてるよ。魔導隊の結果をぶっ壊したエルフがいるって。」

決闘の後、俺はギルドに依頼完了を報告しにきていた。結果を壊した後はエルフの学者らしき人にどんな魔法が聞かれたり。アントシア卿が駄々をこねたので魔法を撃ちそうになったりと色々あった。

「いや、アルカさんあればたまたまですって。」

「たまたまだろうと魔法は凄かったらしいじゃない。今じゃ精霊とは話せても精霊と一緒に闘うなんてもう出来ないよ。」

「な、何故精霊だと分かった!？」

「魔導隊の人が何人が結界を張っている時に精霊の声が聞こえたらしいよ。っていうかその反応だと本当なんだ。」

アルカさんめ中々の策士だな……。俺がどう答えようか悩んでいると隣の受付からサラさんが話に割って入ってきた。

「こらっ！ アルカ！ 言いたくないことを言わせようとしない！」

「え、サラ気にならないの？」

「そんな事より早く報酬金を出す！ もう確認は終わったでしょ！」

「はい、えっと報酬金は銅貨3枚だね。今回の依頼によるランクの昇格は無しっ。」

アルカさんが銅貨を手渡してくる……。こんな雑な管理で良いのか

？つと後でサラさんに聞いたところ「アルカだから。」と苦笑いで返事された。

「あ、そうそう後闘技大会で何回戦えば良いか分かったよ。」

「一対一の勝ち抜き戦だっけ？」

「そう、全部で7回戦。いつもなら10回戦くらいするんだけどね。」

「っという事は優勝しやすいという事ですネ！」

「でも、Aランクの人が8人でるらしいよ。それ以外はあなたを除くと全員Bランク。」

『ご主人様だけEランクだね。』

「あと使い魔持ちもあなたを除いて3人くらい出るよ。」

「ほほう。」

「アルカ、喋りすぎ。」

「はい。」

サラさんに咎められたが、闘技大会について中々いい情報をもたらった。情報は戦いのなんちゃらと誰かが言っていたような気がする。

「ありがとう！ アルカさん！ じゃあね〜！」

「どういたしまして。 アリアちゃんと黒猫ちゃんもさよなら〜。」

「はい！ また！」

『さよなら〜。』

アルカさんに別れを告げギルドを出る。 さてこの後は何をしよう？

視点変更 レイ レオーナ

「第1、2騎士隊はそのまま進め！ 第1魔法騎士隊は遠距離魔法の準備！」

オルアナ王国から見て北に広がる高原、ここがヴァルズ帝国との長年の戦争で最も戦場になった場所だ。東に広がる平原を渡ろうにも平原の主がいる影響で部隊に被害が出る確率が高いので滅多に平原を使う作戦は滅多に出ない（数回あったが）ので平原を中心に見張ることにした。

平原を見張ること数日、ついにヴェルズ帝国の独特な黒い軍服が見えてきた。オルアナ王国の鎧とは対になる黒い鎧を着け、フードをかぶり頭蓋骨のような仮面を身につけているまるで死に神のような服が500……いや1000人近く一気に馬に乗って走ってくる。

「遂に来ましたね……。」

「ああ……。」

隣に居る若い騎士が声をこわばらせる。任務は数回しかしたことも無いのにいきなりの殺し合いだ無理も無い。

「敵と衝突！ 戦闘に入ります！」

「よし！ そのまま戦闘に入れ！ 私も出る！」

「団長自らですか！」

「当たり前だ！ 組織の上に立つ者が前に行かなければ誰が着いてくる！」

私は、レイピアを鞘に入れ馬に乗り叫ぶ。

「第3、4、5騎士隊は私に続け！ 第7魔法騎士隊以外の魔法騎士隊はできる限り魔法を撃て！」

「「「「「了解！」「」「」「」」

さあ！この戦争に勝ち、仲間と共に生き残るぞ！

視点変更 レオーナ 彰

「よし、今日はここまで！ 号令！」

「起立！ 礼！」

今日も、授業が終わった。俺はいつものようにバックには何も入れず高校から出る。出てからしばらく歩いた所で後ろから声がかかる。

「おい、彰！ 一緒に帰ろうぜ！」

「……聡か。」

「相変わらず暗いな。……やっぱり陸の事か？」

「……うるさい。」

おたに 大谷 聡高校に入ってから友達だ。こいつの良いところはいつも明るいところだ。今はその明るさに安心する反面うざったくも思う。

「……まあ、あの真面目でかわいくて男子から人気がある陸姫がいきなり何日も行方不明だもんな。」

「あいつが聞いたら絶対泣くな。」

「だな」

陸姫りくひめ

この高校じゃあ有名な名だ。この平凡な私立高校で好き

な女子ランキングで1位、2位をいつも争う白崎 陸の通り名だ…

…一応男だが。俺が一年の頃、好きな女子ランキングで一位を獲ったというある意味騒然とした出来事が一年のときにあり、この名が付いた。

「正直あいつがいなくちゃ俺のクラスの空気がかなり暗くなって困る。」

「女子からも人気だもんな。」

「あいつに告ったらレス扱いされるけどな。」

あいつは美少女にしか見えない。最近筋トレを始めたとか言っていたがどっからどう見ても健康志向の女子にしか見れなかった。

……そういえば一年の頃からファンクラブが出来てたな。

「……なんだかんだ言っつて、あいつがずっとこの学年の中心だったな。」

「……ああ。」

あいつにそんな事言ったら色々と怒ったりしてくるだろうけど、この学校の中心と言っても良いくらいの人間だった。心は広く、優しく、いつも他人の為に考えていない……俺からしてみれば人生に絶対損するタイプの人間。それでもあいつは……

「理想的な人間だな。」



「……そうか？ あんな苦労しかなさそうな性格はごめんだな。」  
「お前、殴るよ？」  
「え？ ちょ！？ マジやめて！？ グーはダメ！ お前のパンチはマジで痛いんだって！？」

駅に続く通学路で一つの悲鳴がこだました。

## 第20話 アリアの教会探訪

視点変更 彰 アリア

「レイさん……ダラダラしすぎじゃないですか？」  
「でもすることがないじゃない。」

決闘の次の日、レイさんがだらけきっていた。 もう凄いくらいに。

「任務とかはどうですか？」

「え、任務の次の日だし休みたい。」

「……まあ、そうですね。」

レイさんの魔法は凄いいしその反動なのだろうか？とも思ったが単純に面倒臭いだけのようだ。

「アリア、今日は自由行動にしよう。」

「ま、まあそうしましょっか。 私は教会に見学に行きたいので。」

『うん、じゃあね。』

「あ、アリア、これ。」

私が教会に行こうと準備をしていたところレイさんから何か白い石が手渡される。

「何ですか？ これ。」

「精霊石だよ。もしもの事があつたら守ってくれるんだよ。」

「何て曖昧な……。」

まあ、レイさんが言うのだから能力は確かなのだろう。      とりあ  
えず魔導院の制服の胸ポケットにしまう。

「じゃあ、行つてきます。」

「いつてらっしゃーい。」

私は、レイさんに見送られながら。      宿屋から出た。

とりあえず私は、ユグドラシルの方に向かう。      首都ハイルズに  
は教会が一つ、ユグドラシルの近くにある。      その教会ではハイナ  
教関係の大きな行事は殆どそこでやるらしい。      ちなみに女王様は  
その教会の隣にある城で暮らしている。      首都ハイルズはユグドラ  
シルに近づくほど冒険者向けの店は減つてどっちかと言えば実用品  
やハイナ教関連の物を売っている店が多い。      私は、商品を眺めつ  
つも街道を進む。

「うーん……。」

久々に一人になったので気づかなかったが私は目立っているよう  
だ。      ずっとだが私の服は魔導院の制服、周りの人達の服とは雰囲気  
が違う。      私は今更だが周りとは違うことに恥ずかしさを感じた。

「い、今更そんな事考えてもしょうがないです！」

私は、自分の考えを頭から消す為にやや小走り気味に教会に向か  
うのであった。

「……うわー。」

小走りで移動すること約5分、ユグドラシルの木の根元に荘厳な建物が一つあった。窓のほとんどがスタンドグラスで出来ている。どうやらこれが教会のようだ。その隣にもまた大きな真っ白い建物……女王様の城があった。表現が直球だがどちらも絵本に出てきそうな建物……かなり子供っぽいがこういう表現しかできなかった。

私は、とりあえず教会の中の庭に入る。教会には人が少ないが何人が居る。庭の中ではシスター服の女性が掃除などをしていたがこちらに気付きトタトタと歩いてきた。

「巡礼者の方ですか？」

「ん？ああ、そんな感じですかね。」

間違っでは無いだろう……うん。

「迷惑でなければ案内して差し上げましょうか？」

「いいんですか？」

「ええ、こちらも今日の仕事はもう終わりそうですから。」

「じゃあ、お願いします。」

私は、彼女の厚意に甘えて一緒に見学することにした。

「まず、はじめに本堂がここですね。」

「……うわあ。」

シスターに連れられ本堂に入る。本堂はスタンドグラスから入

る光によってとても美しく輝いているように感じられる。

「ここに人が集まるのは降臨祭とお祈りくらいしかないですけど、巡礼者も多いですから一番入念に掃除するところですね。」

「……軽い裏事情が漏れてますよ。」

「ここは広いですから掃除も大変なんですよ。」

降臨祭、ハイナ教が出来る前から会った神話に出てくる唯一の神「ヤルトス」が世界を創り神の住む世界に帰ったという伝説がある。その後一度だけ「ヤルトス」が地上に降りてきた事があると言い伝えられてきた。その日を祝うのが降臨祭だ。私の村でも村総出でやっていたが、多分その比にはならないのだろう。私が、ボンヤリと眺めているとシスターが私に話しかけてくる。

「後、こっちにヤルトス神とハイナ1世女王様の石像があるけど見に行く？」

「あ、はい！ 行きます！」

このとき、私はほとんどの事に驚きつつシスターに着いていくのであった。

「そういえば、あなたの服見たこと無いわね、何処で売っているの？」

シスターが私に何気なく聞いてくる。

「この服ですか？ ……この服は私の友人……というか仲間？ から今借りているんです。」

「仲間？ あなた冒険者なの？」

「いえ、私はその友人について行っているだけです。冒険者じゃ

ないです。」

こういふ言い方すると自分が少し邪魔なんじゃ無いかとも思ってしまう。

「友達は大事よね。」

「はい。」

「ハイナ教でも、「友を絶対に裏切るな」っていう教えもあるしね、知ってると思うけど。」

「常識です。そして「友に絶対に裏切らせるな」という教えもありますからね。」

友が裏切るような行為をするな、そうすれば友は絶対に裏切らないっていう一言をハイナ1世女王様が発したことから生まれた言葉らしい。

「そういえばそろそろ闘技大会ね。」

「そうですね。」

「あなたの友達が出るの？」

「出ますよ。Eランクですけど。」

「……それ大丈夫なの？」

「本人が大丈夫だと言ってますから大丈夫ですよ……きっと。」

「心配ね……あっ着いたわよ。」

「何処ですか？ ああ！ほんとだ！」

こうして私は教会中を案内してもらったのであった。

「少し時間がかかりましたね。」

教会から出たときには夕方になっていた。教会でシスターと話していたらいつのまにか……という感じで時間が過ぎていたのだった。

「レイさん流石にもう大丈夫……だよね？」

レイさんならまだだらけきつていそうで困るがそれもまたいいかも……と思いつつも宿屋に向かう。

「ん？」

宿屋が見えてきた所だった。宿屋の前に人影と猫の形の影が見える。白いワンピースに銀の髪、そして真っ白な肌……レイさんと黒猫さんが宿屋の前に立っていた。

「あ、アリア……。おかえり。」

『教会どうだった？』

「レイさん……黒猫さん……どうしたんですか？　宿屋の前に立って？」

レイさんに質問するとレイさんはやや笑いながら答える。

「いや、ダラダラしたのはいいけど午後暇になったんだよね。」

『午後になってもアリアが中々帰ってこないから待ってたの。』

「そうだったんですか。」

笑いながら答えるレイさんと猫の姿の黒猫さん……私は、この二人に絶対に裏切らないようにしたい。そして、絶対に裏切るよう

な事をさせたくないと思っただ。

「じゃあ、もう宿屋に戻りましょう。」

『うん。』

「夕食を食べようよ。」

「そうですね。」

……裏切るような事はないと思いますけどね。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6778x/>

---

物語の中の銀の髪

2011年12月27日21時02分発行